アルケイア―記録・情報・歴史―
第七号　二〇一三年三月　二〇一―二四五頁
南山大学史料室

吉川房枝氏インタビュー
―南山短期大学人間関係科設立にまつわるエピソード―

林　雅代
南山大学人文学部心理人間学科

Interview with Dr. YOSHIKAWA Fusae: Episodes on the Establishment of the Department of Human Relations, Nanzan Junior College

Department of Psychology and Human Relations, Faculty of Humanities,
Nanzan University
HAYASHI Masayo

archeia: documents, information and history
No.7 March, 2013 pp.201-245
Nanzan University Archives

吉川房枝氏インタビュー　解説
吉川房枝氏インタビュー
はじめに
人間関係科の構想
設置準備
人間関係研究センター
体験学習
心理人間学科
変化
人間の尊厳

吉川房枝氏インタビュー　解説

林　雅代

これは、南山学園オーラルヒストリープロジェクトの一環として、二〇一二年一月二六日に行われた、南山短期大学人間関係科元教授の吉川房枝氏のインタビュー記録である。

吉川氏は、一九二二年生まれ（インタビュー時は八九歳）、一九四三年に東京女子高等師範学校文科を卒業後、高等女学校等に勤務した。一九五〇年からは、神言会司祭故ゲオルグ・ゲマインダ師による聖母カテキスタ会（二〇〇六年に聖マリア在俗会と改称、記録中は「カテキスタ会」と略）の設立に協力、最初の会員となり現在に至っている。一九六二年から一九八四年までは、同会の総会長として在任した。

吉川氏の学歴としては、南山大学文学部独語学独文学科（一九五三年卒業）、聖母カテキスタ学院（一九五四年卒業）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程にて教育心理学を専攻（一九六一年修了）、アメリカ・カトリック大学大学院教育学研究科国際・比較教育学博士課程修了（一九六九年）、Ph.D（学術博士）の学位を取得している。

アメリカからの帰国後の一九六九年一〇月より、南山短期大学英語科（一九六八年に創設）助教授に就任、一九七三年に開設された人間関係科の教授に就任した。

吉川氏は、南山短期大学人間関係科（人関（ニンカン））創設に携わった人物であり、その詳細を記した資料（「吉川メモ」）のコピーは、南山学園史料室および南山大学人文学部心理人間学科に保存されている。本インタビューでは、人間関係科創設の背後にあるさまざまなエピソードが語られている。なお、インタビュー記録中、前後関係や文脈が分かりにくいと思われる部分には、括弧書きで注記を付した。

カテキスタ会総会長を務める一方、南山短期大学で一般教育科目の心理学や教職課程の教育心理学、児童青年心理学等を教えていた吉川氏は、一九七一年六月、立教大学キリスト教教育研究所（JICE）で開催されていた「ヒューマン・リレーションズ・ラボ」の第一七回に参加した。この経緯の詳細は、二〇〇六年一一月四日に行われた「日本ラボラトリートレーナーの会」での講演で言及されており、JLT A シリーズ No.3『講義録 「Tグループと私」』二〇〇八年、六九–九〇ページ（記録中は「Tグループと私」と略）にある。カテキスタ会の会員の二、三名が JICE のラボに参加し、参加の是非を話題にしていたため、吉川氏は会の責任者として自らこのラボに参加してみることにしたという。このラボでの経験が、吉川氏に気づきをもたらし、当時南山短期大学で計画中の新学科を、ラボで行われているような体験学習に基づく教育を行う、人間関係科とする構想につながった。JICE の協力のもと、人間関係科が新設された際には、立教大学よりリチャード・メリット氏、澤田慶輔氏（元東京大学教授、当時は文部省大学設置審議会委員であった）が専任教授として、また JICE 所長の柳原光氏が非常勤講師として招かれている。Tグループ体験において吉川氏の気づきを促した岡野嘉宏氏（社会産業教育研究所）も、人間関係科創設の初期には、Tグループの合宿授業に招かれている。また、当時立教大学の大学院生で JICE の活動に関わっていたグラバア（藤岡）俊子氏が、人間関係科発足時に助手として採用された。さらに、人間関係科の構想および新設にあたっては、当時南山短期大学副学長の大庭征露教授や、アルベルト・ボルト南山学園理事長の役割が非常に重要であっ

たことが、インタビューでも強調されている。

JICEが行っていたTグループ以外に、先行するモデルのなかった人間関係科の授業実践は、試行錯誤の連続であり、教員同士や教員と学生の協同を通じて、ユニークな授業形態が形成されていった。例えば、哲学・心理学・社会学の三つの領域から構成される「人間関係基礎論Ⅰ～Ⅲ」は、九〇分一コマを週一回という一般的な授業形式ではなく、金・土の集中授業で六～七週間連続して行うという、独自の形式で行われた。また、必修科目として、Tグループが合宿形式で行われ、学生は卒業までの各年次に三回ずつ経験した。これらの授業を、複数の教員がティームティーチングで担当したことも、人間関係科の授業の大きな特徴であろう。人間関係科の授業の特徴については、グラバア俊子・中野清「大学教育における体験学習の未来」（『人間関係研究』第一〇巻、二〇一一年、一－三〇ページ）に詳しい。

体験を重視する人間関係科の教育が、カトリック南山学園の教育モットー「人間の尊厳のために」の体現を志向するものであったことも、吉川氏のインタビューにおいて言及されている。個人が単にあれこれの知識を学ぶということではなく、その個人のよさを伸ばし、よりよく生きることにつながるような教育とはどのようなものかについての、吉川氏自身の教育者としての思索が、人間関係科の構想に重なっていた。

また、一九六〇年代後半から一九七〇年代初頭は、社会の大きな変革の中で、宗教や教育、医療など、さまざまな領域において、既存の組織のあり方や権威のあり方に対して異議が申し立てられ、人間性を重視するさまざまな新しい模索が試みられた時代であった。吉川氏の経験した気づきと人間関係科の誕生は、こうした時代の潮流の中に位置づけることで、よりよく理解できよう。

インタビューには、グラバア俊子氏（南山大学心理人間学科教授）、アッセマ庸代氏（同准教授）に同席いただいた。

グラバア氏とアッセマ氏は、ともに南山短期大学人間関係科の元教員であり、南山大学文学部教育学科と南山短期大学人間関係科が合併して、二〇〇〇年に南山大学人文学部心理人間学科として改組された際、この学科に移籍している。

三時間を超えるインタビューにご協力いただいた吉川氏、グラバア氏、アッセマ氏に感謝申し上げたい。

吉川房枝氏インタビュー

吉川房枝
グラバア　俊子
アッセマ　庸代
林　雅代

はじめに

アッセマ　吉川先生に（先日）お目にかかった時に、南山短大人間関係科の誕生のお話もしましたし、やはりお会いするとどうしても人間関係科の生まれた時の頃のお話も伺いたくなってしまうので、いつもお会いする度に人関、人関って言っていたんですね。その数日後くらいに丁度林（雅代）先生…色々と歴史を研究していらっしゃる方ですけれども、学園や大学の歴史、そして学科が作られて今心理人間学科となってますけれども、人関の歴史が引き継がれているので、そういう先生方のお話も取材しているところだという相談が（心理人間学科の）全部の先生にありまして、私は是非吉川先生にお話を伺っておいた方が人間関係科の歴史と心理人間学科の歴史が繋がるでしょう、というお話をしたんです。それから、やはり今、（人間関係科の）卒業生も川浦（佐知子）先生として、グラバア先生達の学生だった人達もだんだん先生になっていくものですから、川浦先生も「この機会にグラバア先生にも人間関係科の歴史を語って頂いたらいいんじゃないか」と、そういう話もあって、それならば、お二人がお話されるところを、私たちが伺いながら、私も初めてグラバア先生から色々歴史の話を聞くチャンスですし、それからもちろん吉川先生とはこういう、ゆっくりとお時間を頂いて歴史

を…その時代を思い出して話して頂けると、私自身が今まで関わってきた先生方との思い出も繋がって分かりやすくなりますし、そして新しい学科の心理人間学科や教育学科時代にいらした林先生が、色々な意味で歴史をまとめて皆さんに紹介していただければ、これはひとつ財産として大事に伝えていく事ができるという風に思いまして、今回はたくさん大勢の人物達になりましたけれども、少し語りの場を提案させて頂きました。

人間関係科の構想

吉川　ざっくばらんな私ですから。でも昔と変わったでしょう?ちょっと。もっと大人しかったよね?

グラバア　一番最初にお会いした時は、Tの中でしたからね、Tグループでしたから。

吉川　その最初のTグループのことは、この前にね、集まり(二〇〇六年一一月四日に行われた「日本ラボラトリートレーナーの会」での講演)があったでしょ。これ(「Tグループと私」)にちゃんと細やかに細やかに書いてありますので。私のTグループの最初の時には、最初のグループにいらしたんですよ。男性が多くて、とにかく合わせて八人のメンバーで、そのうち二人だけ女性だったね。私は、とにかく初めからずーっと聞くだけでしたね。私が発言したのを覚えてるんだわね。とにかくね、私が「藤岡さん」と言ったよね?「藤岡さん、あなた敏感ね」って言った。そうでしょ?それが最初の発言だった。「あなた敏感ね」って私が言ったら、「嬉しいわ、ありがとう」という返事が返ってきた。私は感激したんですよ。日本人って褒められると、「いや、そうではありません」って。「字が上手ね」って言えば、「そんなことない、下手くそや下手くそや」って。「あんた下手くそね」って言うと、「ひどいー」って(笑)。だけど、この表現はね、起こっていること、「私は下手や」、それが謙遜のことみたいだから。たいていの人は褒められても、すぐ何かちょっとマイナス点をわざと言うのね。「グラバアさんこれいいわね」って言うと、初めてね、私が「あなた敏感ね」って一言言ったら「ありがとう。嬉しいわ」。はー…その新鮮さね。私そのくらいしか言わなかったですよ、四日間か五日間あるうちね。

林　そのときグラバア先生は?

グラバア　初めてです。

林　立教大学におられた時だったですよね?

グラバア　はいそうです。JICEの大学院生です(正確には、立教大学大学院文学研究科組織神学専攻の大学院生)。

林　JICEのセミナーにお出になって、ご一緒になられたってことだったんですね。

グラバア　そうです、初対面です。

吉川　トレーニングの時に初対面なんです。だから八人グループで二人だけ女性だったんです。あと皆男性です。自己紹介なんかがあってね。私の頭にピンとあるのは、最初は、私は真面目ですからね。とにかくその話…議題じゃないけど、とにかくね、学びの材料っていうのは、現にここに起きていること、現に起きている事って現に何が起きているか。自己紹介の時に、私がこうでしたああでしたっていう話はね、み

んな過去の話ばっかりじゃないですか。何が起こっているか、現に起きていることは過去のことを話すこと。そういう学びですよ。だから黙っているでしょ。そんなようにして…私が黙っていたでしょ。ちょっと話があちこちいくけどね。そして私のトレーニングの話になっちゃったけど。私のトレーナーはね、メリットさんと岡野さん、岡野先生ですね。それでね、その頃はね、色んなね、何が起きるか分からないでしょう？だからね、順繰りに「あなた」って指摘されるやり方。まな板に乗せられてね。私はなかなかまな板に乗れない。私は黙って一回目、二回目、黙っていたら話ばかり聞いてね。自己紹介。自分はそんなにちゃんと紹介なんかできっこないのに。私はちゃんとそう思っているから、大嫌いね。だからそういうことで、つまらない事をしゃべっている事が現に起きているという事ぐらいしか分からない。何かしゃべったらね、「あら新鮮やな」、なんていうか「敏感ね」、っていうのがしゅっと出たでしょ。そういう発言が、そのくらいで。また後に戻ったですよ（再び黙ってしまった）。そしたらね、岡野さんがやってきて…ほーれ来た（笑）。

岡野さんが「何してますか？」って言うから「はあ、話聞いています」と（笑）。そういうようなことでね。そのことはこれ（「私とTグループ」）に書いてある。とにかくそのときにそれを言っている訳よ。私はそのくらいあまりしゃべらない。

そして学校に…初めから考えてて…この集まり（今回のインタビュー）で何から話そうかな…人間関係科の初めの頃って言ったら…最初の出発。私がアメリカにいて…アメリカにちょっといたことがあるんですよね、そこへ手紙が来たんですよ、南山学園から。そして来年新しい短大をつくるから、あなたが教員、教授になってくれ、その承諾書にハンコを押してここに戻せと。何のことか…仕方がないから私はハンコを押したでしょ。前からうちの会（カテキスタ会）で短大をつくるって言ってて、一緒になってなのか何か分からないけどいいや、と思ってハンコ押して帰ってきて。そして帰ってきたら、もう短大できてたんですよね。そこで短大の先生になったんだけど、そういうようなところで…私は前に若い頃に女学校…高等女学校ですけど、五年くらいは勤めたことがある。国語教えたり地理や歴史を教えたことがあるんだけど、もうちょっと離れてね、ここの会（カテキスタ会）に入ったんだけど、色んな事をして。教えるっていうのは、教壇に立って教えるならいいけど、職員会議でほとんどが男性でしたよね、女性は少なかったよね。その中でね、しゃべっているのをただ聞くばっかりで、批評もあって自分の考えがあるけれど、発言できないんですよ。人がしゃべっている時に聞かないで、自分でどう言おう、ああ言おうと考えているうちにどんどん行っちゃうから、私は言おうと思ったことも言えない。そして私が何か発言をすると、半分くらい聞いて、しょしょしょ…といくでしょ。くだらない、もう何か馬鹿にしたみたいに…考えて言えば取り上げられもしない。そして話の結果は、さっき私が言った事。ちゃんと結論出して、私が初めから言っているのに（笑）。そんなふうに、発言できなかった。

それをね、何ていうのかなあ、あの先生…

グラバア　メリット先生？

吉川　メリット先生じゃない。メリットさんは何も言わん。岡野先生が私にかかってきて、「何考えてる？考えていることを言ったらどうだ？感じた事を言ったらどうですか？」って。私は、「感じたからってわんわん犬みたいに言うことないですよ」って。…もう、そういうような調子でね。それも、今考えるとそれもこれ。その時しゃべったよね、「何だかグチグチ言って何とかするおばさんや」っていうから、腹立ってケンカして…だけどもやっぱり何故そう言ったか。「あなた、ゲームの時に自分のところに札集めて」って。何かこんな？あるでしょ、四角を作って沈黙して何とかって言うゲームあるでしょ？

グラバア　今話した、フィギュアって言ってるんですけども。

吉川　あれをね、その時に、うちのグループはさっさってやって上がっちゃってるんですよ。あの（岡野）先生が「とにかくあんたはね、自分のところに全部札を集めてる」って。「何言いますか、うちなんかさっさと分けちゃって一番に上がりましたよ」（笑）。やることちゃっちゃっちゃっとやるんだけれども、岡野さんは言う、私にね、「あなたは自分のところにみんな札を集める」って。私はね、岡野さんとケンカじゃないけど、何か言うとパンッ、そんなにしてて。そしてもう一度何か言おうとして、そしたらメリットさんが初めて口を利いた。「たとえだよ。たとえ話だ」って言うの。私は「さっさと分けて早かった」って言う、岡野さんは「とにかく自分のところに集める」って言う、私は「集めておらん」。そうしたら、「たとえだよ」って、一言。そのときに悟った。ああ、と分かった。それが不思議なの。それから私、変わったわけ。だから、（岡野先生は）私が黙って何とか、っていうのをよく言うわけよね。というのも、ゲームの時には札を全部集めて人にやらない訳じゃない。ところが、その「たとえだよ」という一言でね、ああ、私は今みんながやっていることを、こうやって見て、一生懸命札を集めているじゃない。私はそれを全部返してあげない。人にあげないでしょう、自分の考えを。その事だと分かった。今までの自分を考えると、何か研究するというと、調査するっていうか、その人の事ばかり見て…ね。調査している姿勢、どういうようにするか、自分を見ていない。自分を見ていなくて人をこうやって…そういうようなことを何と言うほどじゃないけれど、ふっと分かったね。

　で、それを言うのよ、その最初に、何故私が…。大庭先生がね、「この人は何でも言える」って。私は大庭先生に、そのトレーニングから帰ってきて、授業をしなくちゃならなくて。最初の時は人間関係（科の設立）の時、その前からどんな学科を作るかって事を学校で何年かやってたけど、決まらなかったんですよ、色々。そのことはこれ（「吉川メモ」）に書いてあるから言わないけど、私が（アメリカから）帰ってきて、その時に、短大で何を教えてというと心理学、一般心理学よね、それでだと思うんですよ。そして、JICE に行くために休暇をもらって、帰ってきて、すぐまた補講しなくちゃならなくて、新しくできた科の校舎でやっていて、（授業を終えて教室を）出たら、大庭先生がそこに立ってらした。丁度その年に大庭先生が大学を辞めて短大の教授になって来ら

れた。定年でしょ、大学、それで来られた。新しい科、何にするか何にするかって言ってらしたけれども、長く、早く決めなきゃ。私が授業からぴょんと出てきたら、そこに立ってる。「新しい学科何にするか考えてくれ」。その時なんですよ、私が「人間関係科、人間関係科なんかいかがですか?」。「そいつは何だ?」って、こう（笑）。

グラバア　その時ひらめいたんですよね、先生。

吉川　ひらめいたんじゃない、それも訳があるわけ、そういう経験してるでしょ、その時にはっきりは意識しないけども、やっぱり私はあそこのトレーニング、まあうちのグループはなんか、グループっていっても、メリット先生はグループもできなくてあんまり満足でないみたいだけど。全体のあれから…理屈じゃない、私、分からないけれど…とにかくね、その時の感じとしては、あっと思ったね、人間関係科。そんな理屈じゃなしだけれども、このね、このトレーニング、清里でやってるトレーニング、これをこのまま学校にすればいいじゃない、と思ったの。理屈でもない、言葉でもない、そういうアレがあったでしょ。だから授業から出て、全然違うね、心理学と。「新しい学科何にするか考えろ」。「考えろ」っていう言葉じゃなく、もうちょっと丁寧だったんだけどね（笑）。（短大に）いらしたらしょっちゅう大庭先生が私を見込んだか知らないけど、何かあると私に「考えろ」って。いくつか挙がっていたんだけど、私のところで「人間関係科なんかいかがですか」ってひょっと、何も考えないで、授業からぽっと出たらそう言ったんですよ。「そいつは何だ?」。その時には記録にないんですけど、私は日記つけているんですよ、日記を毎日ずっとつけている。その頃ね、ちょっとでも。その時に、その日にね、「考えろ」って言ったその日の午後四時半から六時半まで、放課後ですよね、話しているんですよ、大庭先生と。そして大庭先生、ほら、出張じゃないんだけど、休暇もらってトレーニング（Tグループ）に行った、だからその報告もしなきゃならないから。（トレーニングについての）私の印象はさっき話した事ね。私はこんなだったけど、今は違うと。（報告を聞いて）それはやっぱり大庭先生も覚えていたんでしょ。それでボルト（南山学園）理事長のところに（私を）連れて行った時、まず紹介する、「この人は何でも言える人です」。何でも言えるって、思ったことは何でも言える人です、前は言えなかった。ね?大庭先生はそれを掴んでる。そういうことで、人間関係科はそういうような事ができるようになれる学科、それが人間関係科…。今は理屈でこう言うけど、その時はなんか分からないけど、変なことを、面白い紹介をする人や、と思った。

　考えてみれば…でもまあ、私がそこで捕まえたもの、いわゆる体験学習ですよね。理屈では無しにそういう体験から、私はそういうように自分が変わったでしょ。私は好きじゃなかったんですよ、言えないということが。ドキドキしたから、大勢の男性の前で話したこともないし、言えないでしょ?ちょっと出してみたら、取り上げてもくれなかった。そんなの馬鹿らしい、黙っとけ、と（笑）。そういうのが。それに悔しいわけでしょ、あんまり意識しなくても。でもそれが今、ある意味では自由になったわけでしょ。今言うんだけど、その時そんな理屈考えないですよ。でもそれまでやっぱりね、

記録見ていると、正式の記録（「吉川メモ」）には書いちゃないですよ、そんなことは。だけどあの一言がね、大庭先生が何を言って紹介するかね、私を。初めて人間関係科つくる時にね、「吉川さんです」で十分じゃないですか。こういうような計画で、こんな考えも持ってますって。ちゃんと私、提出してるんだから。それに顔知らない訳じゃないんだし。「この人は思う事は何でも言える人です」って、面白い先生やなと思った（笑）。今考えるとですよ、ずーと繋がっていると思った。一言がね。（大庭先生の）そんな言葉が出ているから、私は（トレーニングから）帰ってきて、報告の中でそれをきっと言っているに違いないですよ。JICEでこんな事を覚えてきたって。だからね、本当にちょっとした一言、それには意味があるんですよ、そういう発言をするからにはね。そういうような事もだんだんそういうことをこうやって感じ取っていく、それを敏感って言うの。敏感さ。敏感だねっていうのはそういうこと。人が何でもないようなことを言って、「何言ってるの。おかしい事言ってるわ」で済ませない。そこに何があるかっていうことね。後でね、あーと思って記録しないけれども、そういうような事を本当大事なことやなと思ってね。私ってやっぱり確かに変わりましたよね。だからね、とにかく理屈で言えばよ、人の話ばかり聞いて学ぶことをする、ある程度だけどね。だけど、自分から何も与えていないのは、自分の為にもならんし人の為にもならない、何やってるんだろうかってね。だから、やっぱり聞くことは大事にするわけだけど、自分から、自分の考えを出していくということは、本当に自分のためだし、これが全部人を成長させるんやなって事を。今理屈でこう言うけれども、そういうのを、私は言えなかったけれども、感じていたと思うんですよね。だから心理学のようにね、学生さんよりも一足お先に色んな参考書読んでね、その知識内容をね、学生さんに伝えていく、その人達は卒業するために、単位を取る為に、一生懸命覚えてさ、それ書いちゃってAをもらってBをもらって、まあ卒業したらパーッとみんな忘れる。そんな授業を何でやる?、そういうところへ繋がっていくんですよ。それが、「人間関係科はいかがですか?」の意味だったと思うんです、あるひとつのね。そしてそこには本当たくさん、後で考えてみたらたくさんね、いやあ、だから言葉では言えない、それほどその時意識していたか知らないけれど、ここのこのトレーニングのやり方は全部学校でやったらいいね、というのがあったと思う。それでまあそういうことになって、そしてボルト神父様と話したら、ここ（吉川メモ）に書いてあるから詳しく言いませんけど、ボルト神父様の希望、こんな科が欲しいというのと、私が言っている事がひとつになっていってる。

それで、それから大庭先生から言われる。「人間関係科にするっていうなら、どんなものかその構想を練ってそれを出せ」って言うわけですよね。その出した後かな、あったのか順番忘れた。ここ（「吉川メモ」）に書いてあるけど、とにかくね人間関係科。とにかく忙しいんですよ、構想…。私はこっち（カテキスタ会）の仕事がいっぱいあるでしょ。だから忙しい。けれども、この次まで、この次の教授会の時までにちゃんと人間関係科の構想、そういうふうにして、どういう風にして学校でできるように構想練って持って来いと言うんです

よね。でも、できないですよね。その時、まだ藤岡先生いなかったですよね。その教授会の間に、記録係やったんだけど、そんなのそっちのけでそこで出せって言われて。その時しかチャンスがない。そして記録係を宮崎（公江）先生お一人に任せて、私は一生懸命で。構想じゃないけれども、人間関係科の目的から、どんな組み立てから、どんどん書いて書いて…「（大庭）先生、はーい」って。大庭先生、「何だ、教授会の記録を取っていると思ったら」。そう言ったけれど、だって先生、急いで出せっていうから。あまり時間ないから…って、まあ言わないけど、私。そうしたらそれを学園の理事会にやって、それから会ったんだと思うんですよ。それが初めてですよね。だからその思いつきでね、構想っていったって、私作ったこともないし、だけどモジモジしてる暇もないし。だからもう…どんなものっていうのがここ（「吉川メモ」）に書いてあるからね、今しゃべったらつまんないものね。お読みください。出した物もちゃんと資料（「吉川メモ」）にみんな入ってますから。

それから構想はできた。構想っていうか、大まかなね、とにかく人間関係科にするって。人間関係科にするか人間関係学科にするかっていう議論があった。学科っていうのは、やっぱり今までと同じよね、何々関係科、心理学とか社会学とか教育学とか、そんななものを寄せ集めたようなものになって、知識をね。だから人間関係学科じゃない、学を学ぶんじゃなくて、人間関係そのものをそこで学んでいくような人間関係科なんだ、人間関係学科じゃないよ。そういうような言葉ひとつでもね、あって、そして専攻はどうなのか知らないけれど、まあそんなことがあって、とにかくそれを学校にするためには、まずそういう理念だけではなくて、そう言ったってどうしていいか分からない。それで、その次のヒューマンリレーションズの後のトレーニングって何かって言ったらね、第一回だったけど、教育計画。教育計画だったらこれはもちろんやっぱり行かなきゃと思って、そこに行った。そしてそこで私が学んだのは、何かそういうような理想があるでしょ、JICEが考える、日本キリスト教研究所が考えているような、柳原（光）先生が考える理想的な、そういうようなものを作ろうとする。何かしようとするには、いつでも計画のときには…これはよく覚えてるね。まず、手始めにそれを進めていく理想、やりたいと思うことを進めるのにプラスになる点とマイナスって…マイナスプラスじゃ困るけど、それを進めていくような…

グラバア　推進力と抑制力？

吉川　そうそう、そういうようなアレを書いてた。ああ、こういう風にしてやっていくのか、と。人間関係科をつくるんやったら、そしたらまず何がプラスになるかな。それは理事長も学長も一生懸命熱心になって、先生達が興味を持っているならプラスやな。そしたらスタッフも集めなきゃならないけど、私の考えもあるけど、それはちょっと問題だな、そんなにスタッフが集まるかね。とにかく新しい学科をつくるには、やっぱり何人、一〇〇人が定員だったら八人、専任教授が要るとかね。決まりがあるでしょ、文部省に。それはちょっとプラスかマイナスか、今のところアレじゃないけれど。そんなことを自分なりに考えてね。一人で考えたってしょうが

ないからね。これは一人じゃだめだから、一番いいのは柳原先生とかね、そのトレーニングをやっている、そこ行って一緒に手伝ってもらうがいいなと思って。

メリットさんが終わって、メリットさんがタンタンタンタンって階段を降りていく。「先生、先生、私、学校でね、人間関係科ってのを作りたいんですけど、手伝ってくれますか?」って言って。そんなこと、昔なら言えないですよね(笑)。そうしたら「手伝うよ」。うんと言ったけど、「どこまでやれるか知らないよ。とにかく柳原先生に聞け」って。それで今度は柳原先生へ。私は昔、初めての男の人に話しかける事なんかあんまりようしなかった。柳原先生のところに行って、「先生、うちの学校で人間関係科ってのを作りたいんですけど、ちょっと助言してくれませんか?」って。「うん」って言ったの。「今はだめだよ。後でおいで」って。そういうことで、それでうちに帰って、頼んだね、大庭先生と学長さんと。そのJICEというところの協力を頼む、助言をもらう、助けてもらう、それを許可もらわなきゃね。私勝手したらいかんから、そしたら宜しいって言って。そしたら、なんていうの、大庭先生とボルト理事長様、「俺たちも行く」って言うじゃない、一緒に。理事長と学長さん…学長さんいつもいなかったから。それで、(JICEの柳原先生に)電話掛けて、「こんな事ですけども行ってよいか?」って、「副学長さんも理事長さんも一緒に行くと言ってます」って言ったら、「そいつは待った。こっちも白紙だ。あんた一人で来い」って(笑)、そういった返事が来たんです。そんなに急に来られたってね。学校でこんなの作るからって理事長が来たら、こっちだってみんな白紙だ、考えてもなかった、学校ですることなんて。で、私は一人で行ったんですよ。半分はドキドキだよなー。全く新しい学校って。池袋で降りて、キリスト教教育研究所のところにとにかく訪ねていった。そしてまあ緊張してますよね。柳原先生だって、トレーニングの時は偉い先生。メリットさんもそんなに親しいってわけでもないし。とにかく行ってお土産持って、お土産っていってもお菓子ですよね、美味しそうなのがあったの。そしてそれもここ(「Tグループと私」)でしゃべってるけど。そしてとにかくお昼に来いっていうから、お昼頃に行ったら、食事ってうどんが出た。それを頂いて、私はご馳走になって。そこにたくあん、お漬け物がついていて。私ね、それをね、慎ましやかな婦人がさ、ガリガリガリっていうの嫌だから(笑)、私残してた。大好きだけど残してた。そしたら何とね、メリット先生が、私の残しているたくあんをこうやって取って、ぱくって食べる(笑)。その新しさ、そのリラックスしたこと。安心しちゃったですよ、笑わなかったけど(笑)。

設置準備

林　メリット先生っていうのは、日本にはもうずいぶん長くいらっしゃったのですか?

グラバア　はいはい。もう長くいらっしゃいましたよね。私が生まれる前から日本にいらっしゃった。もちろん戦時中はお帰りになられましたけど。

林　戦前にいらっしゃって、戦時期だけアメリカに帰られて、

また戻って来られて。日本食も全く問題なく?

グラバア　おそば大好き。

吉川　だけどその後でね、集まりの時（そのことを）話したら、あっちでメリット先生がムーって睨んだんだけどね(笑)。だけど本気で睨んでいない。しゃーない。そんなことばらしちゃう（笑）、私がみんな。だけどもね、私が言いたかったことはそういうことね。すごく人をリラックスさせるでしょ。何も悪くないし、残したんだから捨てるの勿体ないから食べちゃうって（笑）。日本人のお客様がいたとき、そんなことできないよね。だけどそういうことが当たり前みたいにできる人ってね、不思議だった。不思議っていうことではないんだけど、ちょっと。でも私は慎ましく知らんぷりしてすましてましてね。そして私が持ってきたお土産のお菓子を出したの。チョコレート菓子で何か美味しそうだった。そしたらそれ出てきたのね。そしてみんなで食べてたから、私もこうやって上品に食べ始めて。そしたらね、メリットさんの飼っているこんな大きな犬がいるんですよ。それがのっそりのっそり来て、私の横にばっと座るじゃないですか（笑）。

グラバア　フレンチプードル。

吉川　仕方がないから、お菓子こうやって犬に食べさせた、私（笑）。一口食べたら美味しいお菓子だったな。全部…ほとんど犬が食べちゃった（笑）。悔しい…。ああいうの、どうなのかね？でね、メリットさんもね、柳原先生もね、あの犬に「あっち行きなさい」って言ってくれないの（笑）。私がみんな食べさせてるの知らんぷりしてるの。全然何か新しい、何ていうのかな、関係？今ここで言うけどね（笑）、そういうような感じで。それだから和気藹々と好きなこと言えたね。それこそその時に私が考えている事もちゃんと言えた。学長と理事長の考える事もちゃんと聞いてきてくれってね。向こうも私なら話せると思うから気を楽にしてるわけでしょ、正式に理事長が来るより。そんな風にして話して、それで協力…じゃあこの次に三人で。それからですよ、三人で度々行きましたね。

グラバア　そうですね、いらっしゃいました。

吉川　度々って、そんな何十回も行かないけども。そうやって、ちゃんとできちゃった、協力関係が。いつもそうやって、大体は…。だけどボルト理事長も忙しいからね。しょっちゅう行かないから。私と大庭先生と行った事がある。その後で例えば問題だったことは、目標と、それからどういう構成にするかっていうのが分かってきてね、今度は文部省に推薦しなくちゃならない。推薦っていうか、出さなきゃならないでしょ、翌年になってね。その間にね、準備することはいっぱいあったですよ。（図書館の）本をそろえるのも規格があるからね。文部省の規格に合わせて、通さなきゃならない。私もう、先生にワーワー言われながら一人でやったけどね。よく知らないけど一生懸命やった。そして、問題は、ある時だった。私と大庭先生と行った。そこには澤田（慶輔）先生もいらしてたね、丁度、あの…。

グラバア　立教（大学）にね。東大退官してからいらした。

吉川　東京大学を定年退職で辞めて、そちらの大学へいらしてて。そして澤田先生を中に入れる。これも摂理なんでしょうね。一番問題なのはね、そういう新しい学科をするにしても、

そこのスタッフよね、先生達、教授、それを集めるの、それをやりきれるスタッフを集めるのが大変。文部省はその時…五人かな？一〇〇人定員だったかな、五〇人かな。それもね、五〇人にするか、人数が来なかったら経済的にやっていけないでしょ。こんな人間関係科なんか始めて…っていう結論が出て、学生が募集に来なかったらどうにもならない。色んな問題があったですよ。それから、スタッフが大体、文部省が「うん」っていうようなスタッフが来るか。で、私は丁度その時、上智大学の教育心理関係っていうか、何かの先生として霜山徳爾先生という方があって、その方が、私が東京大学にいるときに近くにいらして、上智の近くに住んでて、その先生が私の保証人になってくださったんですよ。それで私が大学卒業してからの話だけど…ずっと後の話なんだけど、私、訪問したですね。やっぱり（人間関係科創設計画についての）意見聞こうと思って。そうしたら「あんたがやるのかね？」ってびっくりされて（笑）。大変だと思ったんでしょうね。だけど、とにかくスタッフとしてね、澤田先生っていう方は、私が東京大学でお習いした先生で、指導教官ではなかったけど、（霜山先生は）よく知ってる方、丁度その方が（立教大学に）いらしてね。そういうもの作る時にね、文部省ではマルゴウ㊟って言ってね、文部省が認める偉い人が入ってないと駄目なのよ。（霜山先生は）「澤田先生捕まえろ、ひれ伏して土下座してでも澤田先生捕まえろ」ってね（笑）。澤田先生っていう方がね、丁度定年で立教にいらしたでしょ。

グラバア　ええ、そうでした、立教で。私も丁度授業で。

吉川　だからよくは知ってたけど、そんなにね。そこまでとは思ったけど、澤田先生捕まえろってことで。そして澤田先生にお願いして、中に入っていただいてね。丁度澤田先生もいらした…。澤田先生と、柳原先生と、メリット先生ね。もう一人、平木（典子）先生…あの方は来るつもりで来なかったんですね。

グラバア　うん、来なかったですね。

吉川　私と、大庭先生と、その五人は集まったことあるな。

アッセマ　（平木先生について）立教大学の学生相談室の方ですね。

吉川　五人が集まって。とにかく大分準備は行ってるんだけど、スタッフが問題だったっていうことね。スタッフがね。専門のそれにできるような、人間関係科を指導できるような、体験学習を理解できるような、そんなスタッフを集められるかっていうことで議論になったわけ、そこで。私はもう端っこについていった。私はもう…何て言うのかね、その時どういう風な人になったのかな。ここに澤田先生、柳原先生、メリットさん、大庭先生、もう一人誰かいた。「五人ちゃんとおるじゃないですか」って私が言った。そうしたら、お互い顔を見合わせて（笑）。そうそう、みんな全部、柳原先生もみんなみんな、そこの教授にしたらいい。みんな顔見合わせて…でも何とも、できんとも言わなかった。そりゃお互いの関係もそこでできちゃったでしょ。それからもうひとつの問題はね、学生がどれくらい集まるか分からんから、経済的な問題ね、やっていけるかってことね。五〇人くらいしか学生集められなかったら、とっても経済的にもやっていけない。それだけの先生を集めてね。「そんなのね、もう…」って、

また私が言う。おしゃべりになったよね（笑）。「そういうのは新しい教育方法っていうのでね、文部省に補助金をもらうように申請したらいいでしょ？その補助金でやればいいじゃないですか」って。先生達はみんな顔見合って…。駄目とは言わないんだけど、みんな顔見合って、私が言うのを笑ってるわけね。できんともできるとも言わない。でも後でいったら全部その通りになったけど。全部来ました、みんなうちに。そして補助金といえば研究？教育研究何とか？ここに持ってきてるけどね。

グラバア　二年目ですね？二年目…補助金ですね？

吉川　補助金。補助金って研究、研究の学校？…にするっていうこと。私がしたら、補助金もらえるからやっていけるって言って。そしたらね、私はね。ボルト神父様から…ここに持ってきたんだけどね。「こんなの来たよ」って言ってね。補助金もらうためのナンバーっていうのがあってね。登録しなきゃなんない。「吉川房枝様」って書いてあってね。「あなたの番号はこの番号です」って。私さっき発見して、「えー、こんなのもらったのかな？」って。結局、補助金が私の名前で来るっていうことだな。今気がついたの。知らないけど、何かもらってね…。「なくしちゃいかんよ」ってどこかに入れてといたんだけど、そんなの資料（「吉川メモ」）になんか入ってないですよ。私、今見つけて、「え？こんなのもらった？」って。確かに補助金もらったよね、学校は、研究校として。新しい教育の研究の、どこかにあるけど、字が読めない。私今、今日見つけたんだよ。

グラバア　そうでしたか。

吉川　だから、こんなものあった…と思って、ここに。

グラバア　資料（「吉川メモ」）に足した方がよくないですか？

吉川　資料じゃない。そんなの私、入れてないもん。別にあったもん。

グラバア　入れたら駄目ですか？入れてもいいですよね、その補助金の資料は？

吉川　資料なんかいらない。とにかくそういうのが来て、「吉川房枝様」って来てね。文部省からの番号がね…。

アッセマ　この番号ですね。

吉川　あ、これこれ。「吉川房枝殿」でしょ。そしてアルベルト・ボルト神父様から来てね。そしてそこ何かっていったらね、科学研究費だわ、科学研究費補助金。

グラバア　科研費ですね。

吉川　科学研究費補助金、研究…何？何て書いてある？何とかの通知。

アッセマ　「研究者番号について」。

吉川　私、研究者になったわけよ。そして補助金をくれるということでしょ。この番号は、この人間関係科が終わっても、ずっとあなたの番号はこれで、これをなくしたらお金もらえないよ、っていう手紙なのよ。こんなのもらった、やっぱり補助金もらったわ。これでもらってるわけでしょ。だからあの時に、「大丈夫、経済のことなんか。だって、補助金もればいいじゃない」って言うのが、自分でも不思議でね、本当に。自分でもそんな勝手なことよく言ったなと思ってね。そして、「ここにいる先生みんな来ればいい。みんなうちの先生になればいい」って。先生達はこうやったけど…みんない

らしたよ（笑）。
アッセマ　一言、一言がすごく…
吉川　まあ、そんなような。これも奇跡…奇跡じゃないけど、本当ね、摂理っていうかね。言葉、言葉ってのは大事なものでね。間違えれば大きな事になるし、上手くいけばね…すごい。言葉っていうのは。だからっていってね、私、こんなしゃべるつもりはないけどぺらぺらしゃべってて、プラスがあったらいいけれど（笑）、マイナスになったらどうしようかって。まあ、それはお任せして。悪い気はないからね。ごめんね、好きなことしゃべって。
林　いえいえ。
吉川　そんなことが色々あったですよね、記録にはしてないんですけれどね。そしてね、今ここ（手元資料）見たらね、藤岡さんからこんなのね、これも今朝さっき見つけた。あ、こんなのがあるわ、藤岡さんから私に手紙もらってるよ。
グラバア　え？本当に？
吉川　今、ここ…ほら、あなたの字だよ。
グラバア　あ、本当だ。
吉川　その当時、まだ来る前。
グラバア　一九七一年…
林　グラバア先生は、Tグループで初めにお会いになって、そこからずっと交流があったのですか？
グラバア　というか、私がキリスト教教育研究所の事務の方、院生の時にアルバイトで、ずっとやってたんですよ。ですから、いつも、ね。
吉川　今日特別にこうやったわけじゃないんだけど、そんな手紙くださいましたよ。
林　じゃあ、その（人間関係科）設置の関係で皆さんがお集まりになってらっしゃるところは、把握されてたってことですね？
グラバア　ええ、そうなんです、横にいたんです。
吉川　その時にはあんまりやれなかったけど、後でできるときになったら来て下さった。
林　どんな事が書いてあるんですか（笑）、そのお手紙は？
吉川　なんか私を励まして下さったね。
グラバア　…どうぞ。…なんか、懐かしい…。（一九）七一年。
吉川　忘れたでしょ？
グラバア　忘れてました、こんな…。
吉川　私も。
林　ああ、図書のね？
グラバア　リストを。
吉川　図書？
林　図書館に入れる、蔵書。
グラバア　蔵書のリストです。
林　短大を設置するのに図書、本がいりますよね。それで、入れる図書のリストっていうことですよね。
グラバア　ええ。ですから私は立教大学キリスト教教育研究所のアルバイトとして、こういうお仕事をして…。
アッセマ　（グラバア）先生が持たれた方が…、カメラのシャッターチャンスが。（手紙を読み上げて）「創造的なお仕事にとりくんでいらっしゃって」。
吉川　懐かしいですよね。ああ、その時お手紙くださってる

わ…って。

アッセマ　グラバアさん、お読み下さいませ、ここで。

吉川　とにかくね、これ見つけたでしょ、探してたら。そしたらそこにごそっと色んな物…こういった物やらあんな物やら出てきたんですよ。いちいち見つけてたんだけど。ただ…ほら、グラバア先生の、こんなの出てきたって。それでね、持ってきたんですけどね、色々ね。たくさんあるんですよ。ごちゃごちゃになって整理するってもう…。でも正式のね、こう…準備のアレではないけれど、こんな事もあったって。私が嘘言ってるんじゃないってことね。補助金ちゃんともらって。私でもこんなに、あなたの研究番号いくら…とかね、補助金もらうための番号なんて、もらったことなんかすっかり、もう忘れてた。さっき見つけたんですよ、これ。

アッセマ　「メリット先生からのブックリストをお送りします」というメッセージ。あ、今、内容をちょっとお伝えしてまして。

吉川　何て書いてあった？私、あんまり読めない。メリット先生から…

アッセマ　「メリット先生からお預かりしました、お約束のブックリストをお送りいたします」。

吉川　ああ、そうか。

アッセマ　「創造的なお仕事に取り組んでいらして、本当に素晴らしいですね」って。

吉川　ああ、ありがとうございます（笑）。

アッセマ　「日本の大学教育の革新のため、おおいに張り切ってくださいませ」。

吉川　ありがとうございます（笑）。

アッセマ　「きっと痩せますよ」って（笑）、括弧して。

グラバア　「痩せますよ」なんて書いてある？（笑）

アッセマ　書いてありますよ。

林　何で？（笑）

吉川　太ってたんでしょ（笑）。

林　そうなんですか？（笑）

アッセマ　そしてグラバアさん、「私の方は九月いっぱいで荒巻さんがお辞めになったので、後任の方が見つかるまで、JICEでお手伝いしております。またお会いできる機会もあると思います。その時までさようなら。一九七一年一〇月四日、藤岡俊子」。聖フランシスコの日ですね。「吉川房枝様」。

吉川　だから、まだ認可の前だよね。

グラバア　ええ、まだです、準備期間で。それこそね…。

吉川　そして認可がされましたらね、もう、早速ね、専任の助手として入ってくださった。

アッセマ　これがメリット先生のイメージです。林さんご存じないので。

林　お写真でしか（拝見したことがないので）。

アッセマ　丁度、壁画を学生達が作って、その時のメリット先生のイメージですね。

吉川　まあ、そんなことを言っていたらね、一晩中かかったってしゃべりきれない（笑）。色んな事あるけど、私ばっかりしゃべってて。何か、皆さんの…。こんなようなことでいいの？

林　もちろんです。

吉川　それからね、（南山学園史料委員会委員長で、吉川氏宛にインタビュー依頼状を送付した）鳥巣（義文）神父様が、「とにかくそういうのは面白い。そんな方がいいよ」って。こっちの正式のアレ（記録）はもうちゃんとあるんだから。だからその他に思い出として色んなね、書かなかったような事。そればっかりでもいいよっておっしゃるからね。こういう事になったんだけれども。

林　これはいいですね、この、グラバア先生のお手紙（笑）。この時はグラバア先生は、南山短大で働くっていうことは、全然決まってるわけじゃなかった時期ですよね？

グラバア　決まってないですよ。

林　全くそういう、こう…決まってるわけではない時期だったんですよね。やっぱりご縁があるんだなーって。私はメリット先生とか、お名前は存じ上げていて、お顔もお写真で拝見していて、ずっと創設からっていうことは、知識としては知ってましたけど、その伏線としてね、グラバア先生と吉川先生の出会いっていうのが、ずっと、やっぱりあるんだなっていう風に思いました。

吉川　そうですね。それはね、私が「敏感ね」って言ったら、「ありがとう。嬉しいわ」って言った。それがもう私には離れないからね。それから、今度は会う度に…やっぱり私、度々にね、JICEで。後で何も知らないのにね、トレーナーに何回かして頂いたしね。そういうところで、色んなところで出会ってますよね、あなた（グラバア）とはね。

グラバア　ここのカテキスタ学院のトレーニングにも呼んで頂いて。

吉川　トレーナーにも何回も、何も分からないのにさせてもらって。何も分からんでもね、突然にああだこうだって、突然にトレーナーになってくださいって言われてびっくりするけどね。あそこがね、すごいと思うのよ、そのやり方っていうのがね、何か分かってるから連れて来るのではなくて、分からんから連れて行って（笑）教育するのよ、色んな。それは話せば長いですけどね。でも、だからって、スタッフミーティングなんていったって、何も言えないでしょ？（笑）何も言えないけれど、やっぱりそこに参加していくって言うことが…。それで私は知らん間に偉そうなこと言えるようになったしね（笑）。偉そうなことですよ（笑）、偉いことじゃない。偉そうにね、「こうしたら、ああしたら」って言ったら、みんなハイハイって言って（笑）。そんなようにね、とにかく、ものも言えなかった人で、教授会でおどおどしてた人がね、数年の間に変わっていくね。すごいね、と思った。メリット先生の事は、まあ今は、メリット先生だけの話じゃないからね。どういう風にして（人間関係科が）できたかっていう、できるまでのこと、私が知ってる。その後のことは素晴らしいと思いますけどね。それから、できてからのことは私あんまり…。自分の会（カテキスタ会）の方が忙しくてね。ちょっと心理学とか教えに行ったくらいで、あんまり関わりができなかったんですけどね。でも、何て言うのかな…ほら、人間関係科で、学校だけじゃなくて一般社会、社会人の教育もしたでしょ？人間関係講座か？

グラバア　ええ、講座がありました。

吉川　たくさんの。私は何十回も参加してるね。一般社会の人の、そういう教育ね。その時のきっかけはね、あんまりないけれども、これに出てるね、これ。

アッセマ　『南山学園創立75周年記念誌』（以下、『記念誌』）。

吉川　その時ここへ出したんですよ、私。これ（『記念誌』）もらったんですけどね。この中に私の名前、私やっぱりね、自分だから、私のこと何か書いてあるのかなと思うわね、人間。それで、索引じゃないけど…見て。名前のところ見たら「吉川房枝」って三カ所くらい書いてある。何が書いてあるか…まだ見てないんですけど。一カ所だけ見た。そしたら結局、人間関係科でやった、一般社会の人間関係講座だった？

グラバア　ええ、研究センターを作って、講座ですね。

吉川　それの出発する元は私が出してると書いてある。ああ、そうか（笑）。とにかくね、それも私の考えっていうよりもね、私、心理学とか教育心理学、専攻だったから、色んなものがね、外国の事とかあるとね、そこにあるんですよね。アインシュタイン…じゃないけど、書いてる。新しい考え方とか。そういうようなものに触れるとね、やっぱり前だったら「ふーん、ふーん」と思ってたんだけど…。ああ、それだったら…何ていうのかな、こういうものもなければならないってね。これもここ（南山学園理事会に提出された「人間関係のアクショントレーニングリサーチセンターを南山学園に設置する勧め」）に書いてある。持ってきたんだけれども。ここにちゃんと資料もあるけれども。それがきっかけで、それを私は理事会に出して。それでアレができたんだから。ああ、そうなの…って。知らない間にできてた。これ（『記念誌』）見てごらん、これ読んで。あなた読んでくれる？私はね、ここの「吉川」のところでね、最後のところ。そういうようなことでね。自分のことばっかり話してるみたいなんだけど、その経験からね。人名の索引のところの「吉川」ってところあるでしょ？そこに三カ所くらいあって。まだ見てないんですけどね。

アッセマ　吉川房枝、一九七（ページ）…

吉川　三つくらいあるでしょ？その最後のページ見て。

アッセマ　最後のページは五八三、五九三…

吉川　何か今時になってね、あれ、こんなことあるのかって（笑）。理事会にポンと出すのに、あれどうなったかな？って。知らないの。それがきっかけであそこ作ったって書いてあるから、自分で後でびっくりね（笑）。

グラバア　もう形になって（笑）。

吉川　どっかにできたんだと思って。

アッセマ　（記念誌を見ながら）結論の導き…「また、この研究センターの発足には、南山短期大学人間関係科設立の礎石を置く…礎ですね、礎を置く役割を果たした、南山短期大学教授、吉川房枝…が、一九七五年八月、南山学園理事会に提出した、人間関係のアクショントレーニングリサーチセンターを南山学園に設置する勧め」、という、何かそういうのを南山学園の理事会に提出なさったそうです（笑）。

吉川　それそれ、それを見つけたのよ。これこういうものですって書いたのをね、今朝見つけるんだからね。こんなものも出したな、と思って。

アッセマ　「そこで定義された四つのポイントを忘れる事が

できない。それらは、教育の人間化と社会の改善・変革、アクションリサーチであること、歴史的展望、学祭的・国際的であることの四点にまとめられ、最近は特に東南アジアの開発そのものや、開発途上国援助等で重要視されている」。

吉川　そういうものを出しているから、それでまあ作ったっていうんだけど。私はその関係知らないから、出したんだけど、どうしてくれた?と思って。

アッセマ　「プロセス論とか、セルフサイエンス、ホリスティック生命学、ボディワークセミナー、色んな科目に繋がっていく」。

吉川　これ（『記念誌』）にはちゃんと書いてあるもんね。それは嘘じゃないって。これ見たら、コピー、私とってるんですよ。それを今朝見つけて、こんなもの出したんだって。

アッセマ　本当にお手数掛けました。

グラバア　でも、今の読んだのお聞きして…。ああと思ったのが、吉川先生がそうやって設立なさったセンターですけれども、この、短大からこちらに移る前ですよね、私は最後のセンター長してたんですが、その時に、今ここにあったように、JICAと国際医療センターの方からお話がありまして、国際協力やってくれないかっていうことで、まあ色々議論もあったんですけど、私はどちらかというと「まあ、やったらいいんじゃない?」という方なので、それで、そういうこともやり出したんですが。今のお話聞くと、本当に元々の理念の中にそういう要素は入ってたんだなあ、と思って。すごく私は、ある意味…ねえ。

吉川　見つけたよ。一九七五年五月八日に。これね、「人間関係のアクショントレーニングリサーチセンターを南山学園に設置する勧め　吉川房枝」って。これを理事会に出してる。

アッセマ　そのことですね、ここ（『記念誌』）にある…はい。

吉川　それなのよ。そんなの私ね、こんなのもらったけど、私の名前が何か出てるのかと思って見たら、そう書いてあるから。えー、そういう関係だったの?って。私、出したこと出したけど、覚えてるけど…。

グラバア　でも、これ（「人間関係のアクショントレーニングリサーチセンターを南山学園に設置する勧め」の書類）もお借りしといた方がよくないですか?

林　グラバア先生の手紙も（笑）。これもね、全部コピーして取っておきたい。

グラバア　それ（グラバアの手紙）もお借りしてよろしいですか?これ（「人間関係のアクショントレーニングリサーチセンターを南山学園に設置する勧め」）と手紙ですね（笑）。返しますので。他にもあるんですよね?研究者番号も、みんな一式お借りしてもよろしいですか?

吉川　いいよいいよ。なくさないでよ、だけど。

林　コピーしてお返しします。

グラバア　林先生だったら大丈夫ですから（笑）。

吉川　アルベルト・ボルトの研究ナンバー?私の研究者のナンバー?これ、今も続いてるっていうのね。消さない限りね、何か研究しなくちゃ駄目なの（笑）。

グラバア　この手紙もですって、私の手紙もですって（笑）。

吉川　何でも持ってけー。

林　グラバア先生は、これは覚えていらっしゃるんですか?

グラバア　覚えてないですよ（笑）。つまり、ほら。リストをお渡しするときに。添え書きですよね。だから…。この手紙もお借りして。

吉川　これにもね、いいこと書いてあるよ。これは私、手伝いに来てね。夕食会するからおいで、っていう…。

グラバア　そうそう、これですね。

吉川　呼ばれて集まって行ったらね、またここでインタビューされて。これだけのことしゃべって。これも今読んでみて、はぁ…と思って。これもあるでしょ？

グラバア　これすごく参考になりました、先生。

吉川　みんな持ってっていいよ。

グラバア　これは先生、ご自分で持っててください。

林　これはありますね。

吉川　いっぱいもらった、私、コピーを。言葉がちょっと気になる。私が何か「ね、ね」っていうのか知らないけれど、会澤（俊三）先生が、これ書いてあるでしょ、原稿。「ね、ね」って言うんですって。ね、ね、ね、ね、って入れるっていうけど、自分じゃ分からない。

グラバア　そうですよ。自分の癖って自分が一番分かりにくいですもんね。

林　これ、資料を三点お借りしまして、コピーを。

吉川　私は何を持ってきたか分からない。ぼーっとある中から引っ張ってきたからね。ただ、勿体ないもんね、なくすのはね。何でもお貸ししますけれども…。

グラバア　なくさないようにします。

吉川　お願いします。これ（「Tグループと私」）は持ってるでしょう、あなた（グラバア）？。

グラバア　はい、持ってます。

吉川　楽しかった。一人でしゃべっちゃったわね。

グラバア　まだありますよ、時間。

吉川　何か質問とか、誰か…

グラバア　時間あります。今、これからお茶を飲むだけです。

吉川　今三時半だから、丁度一時間半しゃべった…もっとだね。

グラバア　二時間？

林　一時半ちょっと過ぎてましたよね、始めたのが。

吉川　私への書類（インタビューの依頼状）には一時間半程度、と書いてある（笑）。

林　いえいえ、あれはちょっと（笑）。

グラバア　あれは間違いですから（笑）、三時間。

吉川　（アッセマ先生が）四時間っておっしゃったの（笑）。

アッセマ　多分、私たちが思い出話というか、おしゃべりしていると、四時間くらいは経つだろうな、と思ったんです。

吉川　ああそう。じゃあ今度おしゃべりして、私今度は聞き手になるわ、ねえ。

グラバア　でもまあ、一応吉川先生中心ですから、今回は。

林　そうですね。

吉川　もう中心になりすぎたじゃないですか。

グラバア　いえ、まだまだ。

吉川　一人でしゃべってたじゃない。

グラバア　まあ（笑）。

林　でも、今日はやっぱり吉川先生を中心にお話するってい

う。

グラバア　そうなんですよね。

吉川　ああ、紅茶がよくあったなあ…

体験学習

林　グラバア先生は、吉川先生と初めお会いになったのは、Tグループだったんですよね。その時の吉川先生の印象とか、何か…？

吉川　だって何十年も前だもんね。

グラバア　まあ、それからおつきあいが長いので。

林　そうですね、そこからなんですよね？ずーっとね。

グラバア　そうです。だから、すごくご縁があるなって。ええ。でもおっしゃったように、本当に真面目で内省的で、でもすごく存在感はあったんですよ。

吉川　真面目で？真面目よ（笑）。

グラバア　内省的。すごく色々、内側で考えていらっしゃる。内省的で存在感がある。

吉川　存在感がある？こうやって（体が大きいというジェスチャー）？（笑）

グラバア　違う…。でも遊びがなかったんですよね。

吉川　遊べなかったわよ。そんな余裕もなかった。

グラバア　そういうお立場もありますしね。

吉川　あの時はね、人間関係科を作るって言った時が、私は一番忙しかったのよ。とにかくね、これはまた私がしゃべっちゃうけど、自分の事だけどね。アメリカにいたときに、何か知らないけど、突然、突然でもないけど、短大作るって話は聞いてたけど、あなたは来て先生になる、承諾書にハンコ押してよこせって。とにかく何なのか分からんけど、それでできるなら、と思って書いて出して。それで帰ってきてみたら勤めることになって。だけど、その帰ってきたの、六月なのよ。学位授与式が向こうであってね、六月の何日かに。その翌日向こうを発ってこちらに着いて、そしてすぐにここへ帰ってきて、そして（南山短期大学）学長さん…（フーベルト）フラッテン学長さんに会いに行って。だけども私、六月の末にね、六月の中旬に帰ってきて、その八月にはここで、この会（カテキスタ会）で、第二回総会。（第一回の）七年後に。七年前にやって。

グラバア　ああ、そうでしたね。

吉川　最初の会長として私が選ばれて、そしてずっと何もないところからいく。アメリカでちょっとね。バチカン公会議っていうのがあってね、ご存じか知らんけど。日本にいろんな通知が来るの遅いんですよ。書類になってくるのが。一年くらい後で情報が入る。これじゃもうついていけないからと思って、アメリカに行って。言葉もできんのにね（笑）。

林　いえいえ。

吉川　本当、Good morning くらいしか知らないもん。How are you?くらいしか知らないで行って。読むには読めたんですけどね。私の女学校っていうのがね、日本で一番に英語教育をやめた学校なんですよ、有名な県立の学校だけど、戦争中でね。とにかく一番にやめたんですよ。残念でね。だから私は英語を習ってない。それで、一人で、独学っていったら

おかしいけど、どうやって勉強したかわからないけど、とにかく英語で何をするにもね。東京大学行くのだって英語が必要だし、とにかく読めることは読める。けど聞けないんですよ、耳から全然入っていかない。だからGood morningくらいはよくても、何言ってるか全然分かんない。それでもね、ドクターの学位取って帰ってきたの。不思議よね、まあ、そんなことは余分な話。とにかくついでに（学位を）取ったのよ。ほかの外国見てね、バチカン公会議の様子を見に（アメリカへ）行ったつもりなんだけど、どうやってたってもったいないと思って、その大学（アメリカ・カトリック大学）に行って、学位をもらって、帰ってきたのね。

林　バチカン公会議は一九六…？

吉川　バチカン公会議は一九六五年に終わったんだけど、こっちにいろんな知らせが来ないのよ。大変、大変だって言ってるけど、わけがわからないの。翻訳も入らないしね。それで、まあ、それだけじゃないけども、私はやっぱりここの中に一人で新しい在俗会みたいなものを作るんだっていったって、全然外国のこと分からないじゃないですか。それで、アメリカに行ってる時のことで、それは余計な話だけれども。そして帰ってきたら…六月の末に帰ってきたでしょ。八月の半ばにね、第二回目の、七年に一度の（カテキスタ会の）総会がある。その時私会長だったからもう大変だったよね。もうとにかく。そして公会議で変えなきゃいけない。出来てから七年間っていうのね。初めの会憲は何も会員がいないときにできた会憲でしょ。それを変えていかなきゃならない。いっぱい問題があって、その時もう既にね、（アメリカから）帰ってきた時、二〇〇人くらい会員がおったんですよ。すごいでしょ。会の組織はないしね、会員は二〇〇人。それをね、就職の世話から全部しなくちゃならなかった。まだ今みたいに地区長がいない…少しおったけどね、そんなような中で。そして総会があって、そして短大からは一〇月から教えてねって言われたわけでしょ。とにかく総会の準備して、総会が終わったらまた会長でしょ、再選されたから、今度新たに。とにかく…よくやったよね、よくできたと思うよ。

林　すごい時期だったんですね。

吉川　本当ここだけの話だけどね。短大（人間関係科）が認可されてね、みんな（授業を）共同でやったじゃない、一人じゃなくて共同でやった。

林　ティームティーチングですか？

吉川　一日中、ひとつの科目ぶっ続けで計画してね。体験学習だからそんなんなんですよ。その時には（グラバアが）もういらしてて、ものすごい助手だった。専任助手だったけどすごいの。夜だって一二時ころまで、いつも学校に泊ってね、プリントしたり。よくなさったよね。

グラバア　そうですね。

吉川　それでもまだちゃんと太ってらっしゃるから（笑）、感心しちゃう。

グラバア　どんどん太っちゃってるじゃないですか（笑）。それにこれはダメだ。

吉川　それくらい忙しい中で…。私何しゃべろうと思ったか、話し始めると自分の考え忘れちゃったけど。とにかくそんな忙しい中。そして…何言おうと思ったか忘れちゃった。

グラバア　でも授業が、本当に丸一日拘束されたんですよね、短大の授業が。
吉川　短大の授業でしょ、それが四時間ぶっ続けてひとつの事やるんだからね。そして一人、受け持つと、私は個人心理学的基礎っていうのを持ったんだけど。澤田先生と組んでやったんだけど。計画から何からはいいんだけどね。一〇〇人くらいおったかね、学生が。一日中のプリントの準備？もうね…夜中にプリントしてプリントしてね。もう間に合わないの。そしたら時々メリット先生が私を迎えに来た授業がある。こんな荷物持って、プリント持って。もう、何しとったか…。若かったからできたね。若かったって言ってももう五〇だったけどね。今は九〇だね。そして少しずつぼけてきた（笑）。だって何言ってるか…ねえ。
林　結局、体験学習だから、時間割って言っても、あれですよね？
グラバア　全然違いました。
林　全然違いますよね。
グラバア　ある科目を、今おっしゃったんですが…。
吉川　みなさん召しあがった？今おしゃべりしてるからストップ。終わり。こういうことなのよ。これをこういうような教育は、JICEでこんなこと教えてくれないもんな、自分でそんなの、当たり前でしょ。ごめんなさい、おしゃべりばっかりしてて。せっかくのおやつを食べさせないで。
グラバア　私食べちゃいましたけど。
林　私もお菓子いただきました。
吉川　本当かい？
林　先生、是非。
グラバア　是非食べてくださいね。
林　お菓子をいただく時間にしましょう。
吉川　何しゃべってるかもう、分からなくなった。
グラバア　ちょっと、カリキュラムの話だけ、私が。
林　ええ。
グラバア　そこだけは説明しますと、すごく変わっていて。
林　何かそれを、Tグループみたいなのを授業期間にやるとか、そういうのとはまた違う？
グラバア　Tグループは必修授業として必ずみなさんが合宿でやる、なんですね。大きく基礎論が三つありまして、吉川先生が担当なさってたのが、最初は個人心理学的基礎っていう、基礎Ⅱって言ってたんですね。基礎Ⅰが哲学的基礎っていうことで。
林　これですよね、（資料を見ながら）基礎論の…初めの。
グラバア　もうひとつは、社会心理学的基礎っていうことで。
林　これ、哲学的基礎…
アッセマ　一〇周年目で作られた。
グラバア　そうですね。
林　これ確かに、吉川先生のお名前があるので。これだから授業の計画を考えてらして、この内容のっていう、そういうことだったんですよね。
グラバア　内容もユニークなんですけれども、結局二ヵ月半くらいは…一般教養もありますので、たとえば木・金・土とか、たとえばですけどね、ちょっとはっきりしないんですが、金土は確かだったんですが、金土が全部、哲学の初めの二ヵ

月半くらいが基礎Ⅰ。ぶっ通しでやるんですよ。

林　ああ、うんうん。

グラバア　次に、基礎Ⅱがぶっ通し。後で見たら、シュタイナー学校の、エポック授業とすごく似てるんですけど。

林　これ（手元資料）にありましたね。この、こういうのですよね。

グラバア　そういうこと。

林　時間割がね。

グラバア　ええ。非常にもそこも…一コマ切れになりますでしょ？だから本当に体験的に学ぶということになると、やっぱり、それをぐっと、その時を生きる、みたいな感じで、続けてやるってことをやってたんですね。

林　やっぱりこれ（手元資料）見てて、今、同じようにはやっぱりできないんだろうな、と。

グラバア　それはね、やっぱりどうしても組織が大きくなりますと、いわゆる一般教養というかね、共通教育の部分も出てくるので、なかなかそれが難しいというのは確かなんですけど。

林　やってる内容もすごく、こういう資料で見てるだけなんですけど、こういうことやってるのかっていう、すごく深みがあるっていうか、ものすごく、こう、きつい（笑）、ハードな内容ですごくやってるんだなという感じがして。

アッセマ　やはり元々がキリスト教教育っていうところの研究所で使われていたメソッドっていうと、顔の見えるもの同士とか共同体自体がこう、スモールスケールなので、ある意味カリキュラムとか計画も自由度が高かったと思うんですよ。

林　そうですね。

アッセマ　だから、科目構成も、じゃあ時間たっぷり使おうなら、お互い譲り合えば時間ができるわけですし、全体のビジョンとか学科の柱がしっかりしたと思いますね。

林　そうですね。

アッセマ　その柱が基礎演習みたいに私たちにつながってきて、基礎Ⅰ、基礎Ⅱ、基礎Ⅲ、っていうのが人関の場合は基礎Ⅰはやはり哲学的とか神学的な基礎で、基礎Ⅱは心理学、社会学的、ソーシャルな基礎で、三番目は？

グラバア　初めは社会心理学的な基礎ってなってたんですけれども、途中から哲学、心理学、社会学っていう三つの柱になったんですね。でもね、そうやってすごく深みがあるっておっしゃってくださったんですけれども、もう最初は大変でした。

林　でしょうね。

グラバア　だってやり方が何にもモデルがないから、大変でしたよね、もう授業のプラン自体が。学生さんも自由奔放でしたしね。それは良かったんですけど。分からないことは分からない、嫌なことは嫌という学生さんだったので。

吉川　次何やるかっていうのでね。

グラバア　大変でしたよね。

吉川　一日中かかって何するかっていうの、大変だったなあ。（人間関係科）できちゃったんだから仕方ないって（笑）。

アッセマ　メリット先生が、初代学科長としていらして、吉川先生は人間関係科の？

グラバア　もう、専任教授です。
アッセマ　その当時、伊藤（雅子）先生はどういうお立場で？
グラバア　共通教育っていうか、一般教育の専任でした。
アッセマ　社会学とか？
グラバア　そうですね、社会学。
アッセマ　私、一〇周年終わってメリット先生がお辞めになったときに入って来たので、人関のスタッフの…
吉川　私が辞めた後でしたね。私は一般教養も心理学も青年心理学も、そんなものも受け持っていたからね。そっちの方はね、わりあい楽だったですよね。
グラバア　そりゃそうですよ（笑）。
林　それは、講義でおやりになっていたんですね？
吉川　だけども、人関関係の、どういうような、何をしていったらいいのかが分からなかったね。それでもよく通ってきたよね、生きてきたよね。
グラバア　だんだん良いカリキュラムになりましたもんね、苦労しましたよ。
吉川　なんだか、何やったんだか忘れちゃった（笑）。

心理人間学科

アッセマ　最後の学科生が二七期生でしたので、二七期で人間関係科が終わりまして。
吉川　まあ、それは短大から四年制（大学）に移って、どういう風になったの？終わっちゃった？
グラバア　今は…、どう言ったらいいのかな。心理人間学科ということになったんですよ。本当は人間関係科にしようっていう話も進んでたんですけれど、心理学っていう言葉が結構、当時、学生を集めるのに良かったんですよ。だからそれ付けろって（笑）上からのお達しで付けたんですけど。
吉川　心理人間…？
グラバア　学科。
吉川　…変な名前やな（笑）。こないもん、ピンとこないじゃない。
アッセマ　でもそれが、大学構想の中で人間関係科は本当にユニークな教育をしていて、そして大学になっていくって時には、短大と大学が結婚しなければならない（笑）っていうか、合流しなければならない時に、大学に教育学科があったんですね。（林は）教育学科の卒業生でいらっしゃって。ですから、教育学科と人間関係科が一緒になる時に、名前が教育学科の先生達の歴史では心理学という言葉が、教育心理学とか心理学がとても学生にとって良いと。ですから、この心理というのと、それから人間関係科の人間って位いうところが残って合成された形になってますね。
吉川　まあいろんな説明があるでしょうけど、私には分からない（笑）。
アッセマ　ですから、ある意味、ビジョンが…まあこれから作らなければならないっていう状況ですね。あとからくるっていう。
吉川　人間関係科をつくる時に四年制にしたかったけれど、いっぺんにはできないからね。後には四年制にするっていうことだけど、メリット先生が心配してらした。でも、すごい、

すごいね、短大は。私は終いまでいられなかったけど、でもそれがあったっていうことはね、やっぱりどっかなくなっちゃえばね、残念だね。

グラバア　ですから、今授業の中では、まあ、言われ方として、「体験系」って言われるんです。

吉川　体験系？

グラバア　ええ、体験系。だからそういう体験学習を中心としたある分野。それから、心理学を中心とした…、そういう風に言うより、体験系と…あと何だっけ、もうひとつは？

林　講義系（理論系）かな？

グラバア　講義系っていう風に、授業が二系統あって、必修科目の中にも体験系はあるので、学生さんが好きに選べるっていう感じでしょうね。Tグループも、人間関係トレーニングっていうことで、合宿形式で今でもやってます。

吉川　今私ね、ふと思い出したんだけど、こういうことっていうんじゃないけど、ひょっと前にも思ってたね。私はだいたい心理学受け持ってくださいって言われたわけよ。最初はね、アメリカから帰った時ね。それで「心理学なんて勉強したことない。私の専門じゃありませんから」って言ったわけよ。私が心理学習ったのは、専門学校行って…、いわゆる心理学っていうんだけど、もう覚えちゃいないし。それから新しい学校でだったら、一年くらい一般教養で心理学っていうのを習ったことあるね。講義受けたことあるけど、専門で心理学なんか勉強したことないから。習って、ああこういうことあったな、ってくらいだった。それだから教えられんって言ったの、教えられないって。そしたら、とにかくね、教授になってくれっていうのは承諾したけど、何するかなんて話なしに行ってる。それで私はそんなのできないって言ったの、専門じゃないし。そうしたら学長さんが「だって文部省が教えていいって言ってるんだから、できないはずない」って言うのね。それが認められて、この学校ができたんだから、私が心理学教えるってことで認めてる、短大ができるんだから。一年前に短大ができてる、だから教えられんことはないって。でも仕方がないからね、自分だって分からないし。昔、若いころにちょこっと聞いた心理学、だけど心理学の本ならいっぱいあるから、色んな参考書読んじゃね、もう本当、学生よりもちょっと数時間前に私が勉強して、それを分かりやすいように授業という形で教える、というのを。私は勉強になりましたよね。そうしたら学生の…短大、まだ二年課程できる前の新入生が、「先生、心理学ってどういう役に立つんですか？」って、こう訊いたの、授業が終わってから。え？と思って、そんなの、あなたがこういうことをやって、どういう風に役に立つのか自分で考えなさいよって。

　とにかく何言ったか忘れたけど。それも考えたですね。それでやっぱり自分でどうなったかなっていたら、JICEのトレーニングに行って、やっぱり授業をね、ただ、事実いろんなものがあるわけでしょ、いっぱい参考書ありますよね、心理学は、どんな役に立ちますか？って言って。太った人がほっそり見せるには横縞着ればいいんだよって、そういう知識ね。それも心理学のあれだけど。ただ事実をそうやって…ね。それで太りたいわ、太っているように見せたいなら、縦縞、これやったら太って見えるわね。ちょっと反対みたいだ

けどね。この目の視覚でしょ。そういう風な生物学的なね、そういうの心理学にいっぱいあるから、そんなの習ったら、応用したらいいし。何か勉強する時、いっぺんに五時間勉強するよりも、ばらばらに一分ずつでも分けたら何十倍も覚えるんだよ。そんな知識だよね。でもそれを応用すればね、役には立つけどね。そこで私が考えたのはね。短大に勤めて、それをそれほど意識したかしらんけど、私がそこで勤めて、そんなようで心理学は教えたけれど、私がちょっと問題にして、教授会の時（人間関係科設置の趣旨説明を行う際に）しゃべったのは、そんなこともあるけれど、自分でやってることは何だと思ったね。その（心理学の）本、そして試験の時にそれを覚えて書いて、みんなばーって忘れてね。何点取ろうとか、何かあるものを覚えて応用できるでしょうけど、役に立たんとは言えないけど、大体、この学校は何のためにあるのかな…。それ（こういうことを考えること）が内省的っていうのかな。私、ただそんなつまんないのを、いつも何のためにっていうのをいつも考えてる。なんでこんなことして時間とって、学生のためにもう忘れちゃうようなこと言ってね。ある人はちょっぴり覚えるかもしれんけど、だいたいはもう心理学なんか忘れちゃって、役にも立たないのに単位取るだけ、卒業するためだけに。そんなようなことを教えててね、大体いいのかなあ…学校にちゃんと「人間の尊厳、Hominis Dignitati」、これが何の意味か？そういうとこはあったね。「人間の尊厳のために」この学校があるっていうこと。そういうようなことも影響してるよね。私が何か求めてるってことね。今ひょっと思いついたけどね。いろいろありますよね。全然話が、せっかく話してらっしゃるの、私が途切らせちゃった？

林　いえいえ。

グラバア　そんなことないですよ。

吉川　だからね、人間関係科ただ作ったって、私がなんで人間関係科がいいって言ったか。「人間関係科なんかいかがですか？」って言ったにはね、それほど意識はしてないけどね、そんな色んな事があるわけよね。ただそうやって、教育って何だっていうと、やっぱり教育者ならば考えるわね、ただこうやって教えてていいのかって。

林　そうですね。

吉川　だから、それを考えていたと思うね、いろいろね。ただひとつだけね。ひょいと思いつきみたいだけど。思い出したんだけどね。メリットさんって人はね、こっちの学校から（私たちが）来て人間関係科作るって言って、柳原先生はやりなさい、やりなさいって言うけど、（メリット先生は）文部省の嫌いな人。規格があって、それにあてはめてね、そういうような教育をすすめてるからね、何かね、すごく嫌いだったの。学校でなんか、学校なんかって。ご自分は学校だけどね（笑）。そんなものね、人間関係。特にまあ授業をこういう風にやってるのは仕方ないけど、学校でない、学校でないところでやったほうがいいよ、そういうような関係だったの。それで私が訪問するでしょ。大庭先生と行く場合と、一人で行ったこともあるね。その時もね、「学校でなんか」って。最初に行った時だ、犬にお菓子食べられちゃったあのときだ。私が裏口（出入口）から帰ろうとしたら、見送りに来てから、「学校でなんかするのは…」ってこう言った。私そ

の時の答えを、今頃ふと思い出しましたね。「メリット先生ねえ、文部省って建物じゃないでしょ?」って言った。「文部省はやだやだ」って言うわけでしょ。「建物じゃないんだから、文部省も変えたらいいのに」って（私が）言う。そういうような、生意気だね。そういうようなことがね、ささっとね。あの先生が私のたくあん食べたおかげでさ（笑）、まったく自由になってね。普通だったらね、私もこうやってトレーナー様、トレーナー様ってやるんだけど、昔の私ならしとやかに…ってね。だけど、その時にはメリット先生はそうやって言って、「文部省なんか」って。「そんな学校なんかでやらんほうがいい」みたいなこと言ってるから、「先生、文部省って建物じゃないでしょ?」って。それがどういう影響したか分からんけど。先生も、こうやったかもしれないけど。そんなこといろいろある。いろいろあったね。反対する人もね、人間関係科なんかって言う、そういうね。それをこう、変えていくのが、やっぱり人間の仕事じゃないですか。だから南山大学の四年制だってね、分からんのが当たり前ですよ、人間関係科のやり方、生き方なんか、分からないのが当たり前。分からないのが当たり前ったら失礼だけど、分かるんだけど、分かるように持ってかなくちゃね、変わらないと思う。

変化

林　私は南山大学の教育学科というところの卒業生で、学生だったんです。心理人間学科ができる二年前に、教員になって赴任しているんですね。教員になって二年間過ごしたんですよ。

吉川　教育学科で?

林　教育学科で、自分が勉強した教育学科で。その後、心理人間学科になってみて思うことは、四大（南山大学）自体がやっぱりすごく変わったんですよね。何でしょうかね…やっぱり雰囲気、変わりましたね。

吉川　変わった?

林　ええ、変わりましたね。やっぱりね、組織自体が全体として大きくなっちゃったから、教育学科自体はもっと緩やかだったんですよ。

グラバア　それはありますね。

吉川　緩やか?

林　のんびりしてたし、柔軟だったし。

グラバア　教育学科がもっとゆったりしてたんですよ。二〇〇〇年からずいぶん変わった、きっちりと。

吉川　いつ変わった?二〇〇〇年?

林　心理人間学科ができた時から、変わったんです。

吉川　ちょっと反対みたいだな。

アッセマ　心理人間学科ができたからじゃなくて、大学の学長とか…大学が大きくなったんです。学科が全部変わったんです。外国語学部も人文学部もいろんな学科が合同になって、大組織になってしまったんです。それで変わったとおっしゃってるんです。

林　そういうところもあるなって思います。それだけじゃない。その人間関係科は人間関係科ですごく独自のことをやっていて、もちろんそれはそれまでの教育学科のやり方とはも

ちろんずいぶん違うんですけど、だけど教育学科は教育学科で、あるいはその前の南山大学っていうのは、もっとこう、アットホームな、ファミリーな感じがあったんですよね。私たちの学生の時もやっぱり学科も小さかったですから、すごく学生同士もつながっていたし、教員と学生の関係っていうのも、もっと密だったし。そういうのが、やっぱり心理人間学科になってから変わったな、っていう雰囲気がすごくあるんです。

吉川　私ね、心理人間学科ってほら、津村さんとかいらっしゃるわけでしょ、こっち側の人間、短大で働いていた方、山口先生とかね。あの方たちが働いてるから逆だと思った。もうちょっと自由になってきたかと。

アッセマ　自由にしたかったんですけど。

吉川　したかったけど、ならんね。やっぱり負けるんだね。

アッセマ　組織が大きくなってしまうと。

吉川　文部省がそうじゃないけど、メリットさんが言ってるね。そういうね、やっぱりなっちゃうね。組織が大きくなるとね。

林　そうなんですよね。

吉川　私はその時行ってないから分かんないけどね。あの方たちが人間関係科の精神っていうか、やり方を受け継いでね、グラバアさんもいらっしゃるしさ、と思って。全然私心理人間学科には行ってないけどね、思ってたけどね。それはやっぱりある一時期そうかもしれない。ずっとそのままいくかどうかは分からない。そういうとこ変えていくのが、やっぱり人間関係科じゃない？そういうところを変えていかなかったら。やっぱり思ったことを言えるってことはいいことよ。やっぱりこれでいいのかな？って思ってるでしょ？「これでいいんですか？」って言っていかなくちゃね。ちょうど私がね、最初の時にね、私はもう面倒になってる、けどそうじゃない。思ったことを言えるってことはね、「この人思ったことは何でも言えます」。今はそう言えないけど。でもね、そうやって変えていかなかったら教育は意味がないしね。だからね、それでこう言ったらどうなるか？なんていってね、怒られるのかな、なんてそんな考えは駄目だよ。だから私は「文部省って建物じゃないでしょ」って言ったね。メリットさん、変わったもんね。こういう風に規格があって押しつけられるから、これこれこんなことはできないって、決めるんじゃないけど思ってたわけでしょ。だから私、文部省はどういうところですか、人間がいるところだし、人間が作ってるのが文部省でしょ。そこには澤田先生がいらしたしね。澤田先生引っ張れっていう上智のあの先生も、文部省の顧問みたいな方だったわけよ。澤田先生とね、それから霜山先生がね。二人はとっても仲良かったみたいね。一方は上智大学、こちらは…。

アッセマ　私、霜山先生と上智大学で同じように建物にいらしたんですよ。心理学科で六階にいらして、私は化学、生命科学だったので七階にいて。

吉川　今はどうしていらっしゃるかな？私がずっと六年間東京の大学にいた時代、私の保証人になってくれた。出かけて行って保証人になってくれって言ったでしょ。人間関係科を作る時に、霜山先生に相談に行った。そしたらその時に、「澤田先生捕まえろ」っておっしゃってくれたでしょ。そういう

ことで動いていくんですよ。そうでなきゃ、どうしていいか分からなかったけど。「澤田先生捕まえなさい」って。文部省のさ、そういう規格かもしれないけど、こういう人がいなきゃ駄目って。とにかくそれに従って、いいことだから捕まえろ捕まえろって。私は会いに行けなかったけど、でも後で聞いたら、私は用事があって行けなかったけど、大庭先生が行かれて、澤田先生が何でおっしゃったか聞いたの。これ個人で聞いたんだけど。澤田先生がおっしゃったことは、「吉川さんがやるなら行きましょう」って。そして、短大に来たっていうの。大庭先生が教えてくれたけど。またそれだけのことだけどね、どういう意味かなあ、と思うよね、やっぱりね。だからそんなことで、やっぱり、思ったことは出していかなくちゃね。そうしないとさ、ゲームの時に、カード集めるみたいに、こうやって、こうやって。

アッセマ　どんな感じの先生でいらしたんですか、吉川先生って？どんな感じの先生でいらしたんですか？

グラバア　どんな感じって？

アッセマ　あ、先ほどおっしゃったのか。すごくアクティブ？

吉川　うーん、違うよね。

グラバア　最初はそうじゃなかったですよ。

林　Tグループで変わられた？

吉川　Tグループのときは、ただそれだけの話だよね。それはあの先生が、なんやかんや。岡野さんがあんなに言ってくださったからね。岡野さんは、私が言ったら、「何グチグチ言う。グチグチ愚痴ってるおばさんみたいやね」って。おばさん？何だ？って（笑）、内心はそう思うからね。内心だからそりゃ口には出さないけれど、腹が立ってね。また言ったら、また。そういうようなことで、あの人言わそうと思ってるの、この人どう思うって。「ちょっと変だと思わないか、意気地なし、と」。男性なのね、「意気地ないと思わんか？」。「思います」。「何しとる何しとる、おかしいこと言うとること思わんのか？」って。「思います」って。そういう返事をして。そうしたら、「思ったら言えばいいじゃないか」って言って。「思ったからってらワーワー言う犬みたいなの嫌です、ワンワン言うの嫌です」とか。そういう風にバッバッバって。だから全然大人しくしてたとか、内心違うんです。そんなことでバンバンバーンって言える…言えるって、自分で不思議だったね。上品に大人しくしてるのが、自分の格好だったけど、それでやっと助けがあってね。そういったことで考えてみたらどうしたらいいか、人によって形は違うけれど、あの経験はね、何にもなかったみたいだけど、やっぱりね、いい経験だったと思うんですよ。でもそれをね、あっと思う瞬間があればありがたいですよね、私がはっと思ったんでね。たとえ言われても、それが分からない。「私はちゃんとやりましたよ。自分のもらったもの、みんな配りましたよ」って言って。もうしょうがないのよ、トレーナーが何言ったって私がそう言うから。グチグチいうおばさんだって言ったら「なにーっ！」って。そんなことですよ。また私が何か言おうと思ったとき、メリットさんが「たとえだよ」。それをぱっと分かったのは、私のやっぱりどこかのね…恵みかな。

林　あったんでしょうね。

吉川　ね？はっと思った、その時に。それがあったから、全

部トレーニングの意味が分かったね。理屈でこうした、ああした、ああだから、こうだからじゃないんだって。それから私は考えて、ああ、自分が黙ってるっていうことは、誰のためにもならない。こうじゃないか、いい考えがあったって、黙ってたら何にもならない、自分のためにもならないし、人のためにも、それをやっぱり提供して、もらうばっかりじゃなくて、あげなさいっていうことよね。それには、やっぱりオープンになって出さなくちゃダメって。その時にね、言葉じゃないけど分かったんだよね、多分ね。今から考えてそうなんだもん。その時いちいちそんなことで考えていられないけどね。

アッセマ　私もその、メリット先生の一言?その「たとえだよ」っていう。

吉川　「たとえだよ」って言ったの、それだけ。

アッセマ　先生が先ほどおっしゃってたのは、その一言で「あ、それで悟った」とおっしゃったんですよ。

吉川　うん、後で悟ったってことだけど。

アッセマ　私たちは今大学の教育の中では、「気づき」とか「体験から学ぶ」っていう言い方しますが、私はやはり吉川先生のカトリック教育とか、キリスト教的な風土と、そして、人間関係科っていう、非常に私から言わせると在俗的な神の位置づけっていうか、そういうようなものがすごく一九七〇年代の吉川先生の時代にずっと繋がって、今、人間関係科ができてきたんじゃないかなって感じました。ですから、アメリカにいらした時に、そういう在俗修道会を作られようとしている波と、それから人間関係科とか、立教大学のキリスト教育研究所のやりかたとか、リラクシングしてる仲間で生きていく家族的なもの…カトリック的な、家族的なものと、そういうものが周りと公立の強い教育の風土の中に、だんだんとこう、繋がることがあったんじゃないかなっていう風に、ちょっと思いました。

吉川　うちの大学は…そのずっと前に、一九五〇年に私はここに来たんですよ。この会を作るためって言ったらおかしいけど、それもね、まあ不思議なことでね、一九五〇年に来てるんですよ。そしてアメリカに行ったのは（一九）六五年ですから、一五年間。その間ずっとね、ここにいて。最初の（カテキスタ会の）総会は一九六二年。東京大学を卒業してから帰った、その翌年?に第一回の総会があって。だからその後ですよ。会長になって在俗会もこうしてずっとやってきたけれど、他の在俗会がどうなのかも分からないしね。

アッセマ　まだ新しかったですからね

吉川　バチカン公会議って。みんな在俗会って新しかったんですね。そしてその時丁度ここで人間関係科を作ろうってやってる時に、一九七二年に、ローマで初めての世界にある在俗会の、第一回の総会っていうのがあったんですよ。そこに出席した。アジアの在俗会（アジアで生まれた在俗会）っていうのを知らなかったから。私は初めて、言葉も分からないのによく行ったと思う。それでそこで最初ですよ、世界の在俗会の、世界連盟っていうのかな、最初の、第一回目があって、私が行って、そして同時通訳っていうかなんか知らないけど、そこに出席はしたけれど。そこで、最初の、第一回目の実行委員、そうしたら私が選挙されて、なってしまったん

ですよ。そこで、みんながね、何だ、言葉も分からんのにって思う人がいたかしらないけど、すごかったよ、あの時のそういう話も。私はただね、とにかく行ってみなきゃと。みんな誰も知らなかった、アジアに在俗会があることを。何かの時に招待来て。ゲマインダー神父様が行けっていうから、また言葉も分からんし、行ったけれど。そこで世界、百いくつあったかな？当時、まだその時、それくらいしかなかったけど、十カ国から、委員がね、実行委員っていうのがあって、その時に私は選挙されて、委員になって。そっちの方も、毎年ローマに行かなきゃ行けなかったから、まあ…ね。

そして今度はアジア会議があって、アジアのそこの。アジアの在俗会っていうのは（カテキスタ会の他に）まだない、うちが一番だったんだけれども、その時も何か集まりをしようっていうことで。そこでも、なんて言うの？そこでもあっちこっち…。まあ、面白かったけれども。だから、今考えると、人間関係科もどこかね、悪いけどちょっとそっちのけみたいな感じになっちゃって、もう色んなことがあるわけ。在俗会も、そのものが新しいですね。一九七二年に第一回総会だから、丁度ね、ここの人間関係科つくるときの。それで世界会議で、世界の在俗会の決まりも作らなきゃなんない。だから、全国のカトリックのね、新しい協会を作るなんて、そういうところに関わったり、在俗会の協会を作ったり、そんなことまでもみんなしてね、どうやって生きてたかわからんくらい。だいたいその頃だったら、今考えると夜二時前なんかに寝たことないよ。そして、会員がもう全国に当時二〇〇人くらいおったんだけど、今みたいにね、連絡するにだってね、電話、市外電話ってのが手続きがいってね。あの頃でしょう？だからもう、急ぐ時なんかもう一日に三つくらい電報がきて、電報で返事するとか、こういうことをして。夜なんかもうその頃は、夕食して七時からみんなが祈りにいく時、電話が始まるね。部屋の中に電話をつけてもらったけど、考えてみたら、七時から夜の一一時まで、かけっぱなし、立ちっぱなし。次から次に電話かけてくる。今考えるととね、そして短大に務めながらね、帰ってきたら返事をしなければならない手紙が五〇通はいつもある。（返事を）書いても書いても書いても書いても。そして、暮れに「今年のはすませよう！」って必死になって返事出したと思ったら、もうお正月になるとね、翌日からまたばーって（笑）。今電話が簡単にどこへでもかけられるでしょ、外国にでもね、今ローマにだってちゃっとかけられるしね。その時そんな時代じゃなかった。自分の大変だったこと言ったって、何にもプラスにはならないけどね。

でもね、そういうところを通ってきたのはね、自分じゃできなかったわけでしょ。私はいつでもここで、話した時も言ったけれどもね、本当ね、神様はね、大変だ大変だって言ってたって、大変なところで一生懸命ちゃんとそれに従ってさえいればね、なってるんだなーと思ってね。やっぱりそこを見ると、宗教くさいこと言って、神様のことなんか言うたらいかん言うけど。だって事実だよ、本当だよ。それをやっぱりわからないと。自分でも時々ね、いいのかな、なんて思って、自分の信仰がね、弱いからね。だけど本当、自分だけじゃ何もできないな、と思った。自分がやってきたことでも、できなかったねと思うね、本当に。もうどうなるかと思う時でも

ね、いつもいつも助けがくるもんね、必ず。来なかったらそれは神様が望まないんだよ。やめなさいって言ってることと、そう思うのね。だからね、そういう信仰をやっぱりね、本当に押しつけでなくて、そういうことも分かってくれるような。人間関係科の条件としてね、宗教的であること。

それからね、私立学校。私立でしょ？短大は私立学校でしょ。私立学校の規則をちゃんと読めば、「その私立学校の特徴を活かさなければいけない」ってちゃんと規則にある。これがカトリックの学校であるならば、カトリックであるというその精神に従って教育をするんだっていうことをばっと出さなきゃ私立学校の意味がないですよ。ということは、そういうことくらい私はしっかり持っている。そうしてみんなに言うと、みんなは怖気づいてね、文部省、これ駄目、これは宗教だから駄目。そうじゃないよね。だからそれだけのね、自分でも今こんなこと言って、また宗教、神様なんて言って、そういうようなことをね。まだ信仰の弱い時にね、今だってそうだけどもね。やっぱりね、場所もある。そんなこと言ったって全然ね、相手にもしない、いっぱいね。神様だけじゃない、悪魔だっておるから。それを利用して変な風にするから、あんまり神様神様って言ってたって駄目、賢くしなければだけど。でも本当の自分が信仰を持ってなきゃ駄目よなあ、って思うけれど、その信仰が弱いんだよ。だけど弱いけど助けてくださいって言ったら神様助けるけど、私がやろうって言ったら助けてくれん。私ができると思ったら神様は助けない。私はようしないから助けてーって言ったら、ちゃんと助けてくれるっていうのが本当ある形でね。という風にね、自分で励ますわけよ。ちゃんと信仰持ってればいいけど。私はでも、すぐにふらふらしてしまうからね。でもその弱さの、信仰の弱いことは助けて下さいって、信仰の弱さをね。どうぞ、神様が駄目だって言うほどまでに弱めないように助けてくださいよってね。だいたいのこと何かしようと思ったら、こう怖気づくけどね。私なんか、私なんかって謙遜のつもりでね。日本人の癖ですよね。今は知らない、今の人は知らんけど、私が若い頃なんかね、やっぱりね、自分が何かそう言うこと言ったらね、傲慢みたいにね、謙遜でない。そうじゃないわな。謙遜っていうのは、自分のあるがままをちゃんと見つめる、ちゃんと掴むことよ。謙遜ってのはあるがままを認めるっていうことだからね。私がこれを持ってるって言えば持ってる。ありがとう。持たないって言ったら助けてくださいよってあっさりと言えるようになればいいな、と思った。これも余分な話かもしらんけど。私は何か知らん、今そんな感じがした。今考えてみると、人間関係科ね。これもした、あれもした。何で私がそれができたのか、不思議だよ。考えてみたら。知識もないのにね。あの先生から「グチグチ言ってるおばさんみたい」って言われてから、カーっと怒ったりとかさ（笑）、そんなような、本当にグチグチして、ものもよう言わないで。今なんて、ちょっとしゃべりすぎるけどね、ちょっとそれは困るけどね。

私の今の癖っていうのは、何かお話しした後で「すみませんでした」って言うわけよ、私は。必ず言うのよ。「ごめんなさいね」って言うの。何でそんなに「ごめんなさいね」ってね。っていうのはね、私はね、そうしようと思わなくてしゃ

べっちゃってね、ああ悪かった、忙しいのに…私のために時間取って…と思うんだ。それは本気なのよ。だから「あらごめんなさいね」って言っちゃうのね。そしたら「いえいえ、楽しかったわ」って言ってくれるけどね、みんな上手だなーと思って、私思うんだけれどね。まあそういうようなことだって何かしらね、分からない（笑）。自分が分からない（笑）。ここらで本当に迷うこんなような大事なことをね、しゃべったらよかったけど（笑）。って言ってまた、ごめんなさいね（笑）、これ癖なんでね。ある時にね、もう亡くなったんだけど、うちの会の人で、いつもね、病気で寝てたんだけど、しゃべっちゃうわけよ。そうしてから、「ごめんなさいね」ってまた言っちゃうんだね。「今度から気をつけます」ってね、言ったのね。「今度から気をつけるわ」って言っても、自分でしゃべってしゃべって。そしたら、その人何て言ったと思う?-「変わらんでしょ?」って（笑）。

グラバア　それに関しては、そうなんです（笑）。

林　そうなんですか?

吉川　そう言ったって変わらない。自分でどうしてこんなにしゃべれるようになったか分からないけど。でも元々からそうなのかもしれない、内弁慶だっただけで。でもね、本当に何か取り柄がありましてね、なんだかね。だって記録はみんなあるしね、プリントあげたから。

グラバア　でも、今日お聞きしてね、ああ、すごかったなって分かったことも随分ありますよね。

吉川　ん?

グラバア　今日ね、お聞きして。ああ、そうだったんだ…って改めて、分かったこともあります。

林　どんなことですか、それは、グラバア先生?

グラバア　私にとってですか?やっぱりその、なんていうのかな、いくつかあるんですけど、具体的なことは、先ほどの人間係科研究センターのこと、人間関係研究センター設立のこと、設立の経緯。私もちょっと。その時いなかったのかな…ちょっと分からなかったので、今日初めてそうだったんだと分かりました。それからもうひとつは、物事ができていくっていうか、人間関係科、今回のお話はそうですけれども、できていくっていったときに、やっぱりお一人の力っていうものが、いかに大きいかっていうことが分かりました。何度もおっしゃってるように、これが大切っていうことで、それを言葉にして語っていく、公表していくっていう。それも然るべきところにしていかなければならないんだなっていうことも分かったんですけれども。そういうようなこと。でも、その…やっぱりお一人がいなかったらできなかったということだと思うんで。

林　そうですね、と神様ですね（笑）。

グラバア　もちろん、そうなんですけど。でもそのお一人がいなければ、始まらなかったっていうことだから、やっぱり一人一人の思いと言葉っていうものが、すごく大事だなっていうことを再認識しました。

吉川　お互いにね。本当よ、一人一人が大事なのよ、一人一人が。

林　私は、今日本当に初めて、吉川先生にお会いしたわけですけど。お話伺ってて、吉川先生はなかなかものが言えな

かったとね、しゃべれなかったっていうことをおっしゃってたんですけれども、やっぱり何かこう、何か言いたいとか、何か変えたいとか変わりたいとか、そういうのをずっと秘めてらっしゃったんじゃないかなと思ったんですよね。それは多分、修道会が変わる部分と、人間関係科っていうものができて、それまでの学校教育のスタイルを変えるっていうのと、先生ご自身がものを言えるようになるみたいな、そういう変えるっていうことがいっぺんに起こったんじゃないかと。時期的にも、いっぺんに起こったんじゃないかなって感じて、すごく面白かったですね、今日のお話は。一人の人が変わる部分と、学校が新しく変わっていく部分と、修道会もまた変わっていくっていうことですね。そういうものをやっぱり先生がずっと秘めてらっしゃったのかな、っていう感じがしました。

グラバア　中にあった先生の力が、あれをきっかけにして、本当に出てきた、っていう。

林　そういう感じがしましたね。

グラバア　しましたね。

林　伺ってて。

アッセマ　私も、メリット先生の一言に助けられた吉川先生と、吉川先生の一言で、「文部省…」の一言で助けられたメリット先生がいて、何かこう、二人の縁は…。でもその一言っていうのは、吉川先生にとっては「たとえ」っていう言葉は、私は聖書からの言葉の風土があったから、「たとえだよ」って言われた時、私そこに何かキリストを感じたんですね。

吉川　「たとえ」の意味？

アッセマ　ええ、だから「たとえ」っていう言葉に非常に敏感な先生がいらしたんだろうなっていう。

吉川　一生懸命この事実を言って主張してたけどね。「そりゃちがう、私はあなたが言うようなしたいことをしないしない」って言ってるけど、「たとえ話だよ」って言われたら、どういうたとえかなっていうのはふっと思った時ね、考えて分かったんじゃなくて、やっぱりパッとね。

グラバア　パッと繋がったんですよね。

吉川　「たとえだよ」って言われた時に、はっと思ったよな。

アッセマ　こういう悟り方、ものの知り方があって、学校にまでなっちゃったというか（笑）。

吉川　それがすぐっていうわけでもないけど、やっぱり人間の、ものを理解するっていうときに、なんていうの？「あっ」、ていう、それ、大事なのよね。「あっ」、て気がつく。考えて考えていくこともあるわけだけれどもね、色んなものの分かり方あるけれどね。それがどういう風にして起きるか、それはもう分からないけれど。たとえによって、たとえ話してるのに、事実と結びつけて「違う」って、あーだこーだって言ってるのがね、それがもう理屈ではなしに、考えてじゃなくて、「たとえだよ」って言われた時に、そのことが分かっちゃうっていうのは、「あっ」ていうのがあるでしょう？あるでしょ？もの分かる時に「あっ、そうか」って。

アッセマ　それに、日頃の先生が聖書に親しんでらっしゃるんだなって。

吉川　いいえ、私はそんな…。

アッセマ　「たとえ」って言われたときにふっとこう…。

吉川　それはあなたの話よ、あなたの。ただ、私はたとえ話が分からなくて、まだ「あっ」ということにいかない。イエス様はたとえ話いっぱいするけど、なかなかその「あっ」までいかないの。たとえ話がわからないの。なんでこんなに言ってらしゃるか、分からんことはいーっぱいある。でもああ、それをね、考えてたって、分かるときは分かる。

人間の尊厳

林　あともうひとつ、やっぱり今回このインタビューの準備のために、慌てて人間関係科のことを勉強していて、今、心理人間学科というところで見ていて、私の理解している、その…体験系の授業は、結構プラクティカルな印象っていうんですかね、人間関係っていうものを、すごく実践的な…

グラバア　分かる感じがします。

林　そういう感じがしていて。でもそれは、やっぱり今の（南山）大学の風土っていうものも大きいなっていうことを思うんですよ。教育学科時代は、もっとやっぱり、カトリックな雰囲気ってすごくあったんですよね、教育学科自体にね。人間関係科も多分そういう雰囲気だったと思うので。まあカトリックというかキリスト教的な雰囲気がおそらくあったと思うので。それが、改組で心理人間学科というのができるというので、組織が変わって、ちょっと雰囲気が変わったっていうのがあったのかな、っていう気もしたし。私は…そうですね、やっぱり人間関係の問題って、結構プラクティカルな捉え方をするっていう、そういう色んな実践だとかっていう風に、体験学習を理解していたんですけれども、体験するっていうことのベースに、キリスト教的なね、思想というか、キリスト教的な啓示とか、そういう何かがあるから、日本でTグループっていうのがひとつ、立教大学のようなところで行われたっていう、そういうことがあったのかな、っていうことを、初めて理解したし、そのキリスト教的な、あるいは哲学的な、そういうベースっていうのは、ちょっとやっぱり大事にしたいところだなという気が改めてしましたね。

グラバア　外から見てると、どうしてもね、体験学習ってプラクティカルに見えちゃうんですよ。

林　そうかもしれないですね。

グラバア　動いたりとか、実習したりとかっていうことで。だけど、そこで目指してるのは、本当に人と人とが実際に向き合うっていうことと、向き合ったことによって、やはり他者をどう受け止め、自分自身をどう受け止め、そこで向き合ったことによって、新たなものが生まれるっていう、そこが大事で、そこって、見えないんですよね。

林　やっぱりね、そこに神が、やっぱりいるんじゃないかって気がするんですよね。その部分が、何だろうな？そういう風に言葉で語るっていうことではなくて、本当にこう、全体的な雰囲気とかね、そういうもので伝えるべき部分っていうのがあるんだな、っていうことを私は感じて。それは、あんまり言葉にして、どうこう言うべきことじゃないのかもしれない。先ほど、吉川先生がおっしゃってたように、あんまり神様とかね、そういうことでどうこうっていうのは、良くないっていうことなのかもしれないけれども、でも、そういう

ものが何かあるんだな、っていうのを、初めて、私は初めて感じました。今回。

グラバア　素晴らしい。

林　先生がね、さっき、神様とか宗教の話をするのはあんまり良くないんじゃないかっていうようなことをおっしゃってたと思うんですけど。

吉川　思っちゃう時があるでしょ？

林　でも私はね、それはむしろすごく大事な部分だな、っていうことを、感じたんです。

グラバア　吉川先生がおっしゃったのはそういう意味でなくて、そう思いがちだけど、本当はそうじゃないんだっておっしゃったと思うんですね。

林　でも私はね…

吉川　私が思うんじゃない、人にそういう風にね。

グラバア　捉えがち。

吉川　公立の学校だったら宗教の話したらいかんとかね、そんなことだいたいの人が思ってるじゃない。教育だから。カトリックの学校だから、今は言ってもいいけど、そんな感じがするけどそうじゃないんだよって。でもそれはね、場所を考えなきゃいけないな。

林　それはそうですよね、もちろんね。

グラバア　まあ私は…猿投宣言（二〇一〇年三月一三日～一五日にかけて愛知県豊田市猿投温泉で行われた心理人間教育研究会〈通称：教員合宿〉において合意された、心理人間学科の学科作りのモットー）があったじゃないですか。共同体って言ってるときに、私は…教員合宿があるんですね、心理人間学科には、人関みたいに。そこでどういう方向性っていった時に、共同体っていうことを大事にしていこうって、みんなで合意したんですね。それはむしろ教員と教員もあるし、教員と生徒もあるし、生徒同士もある、っていう、そういう共同体を目指そうと。まだ具体的にはあれですけど、そういう方向性はみんなで合意したんですね。だからそこに、私は吉川先生のおっしゃっていたような、そういう宗教の入る余地っていうのかな、本当に愛の共同体っていうか、そういうような可能性が十分あるな、って今は思ってて、そこを大事にしたいって、私はね思ってるんです。

林　どのくらいメンバーが…そういうイメージっていうのを共有できるか、というのかな。

グラバア　でも…私は結構、先生方、本当に学生を大事にするっていうところは共通してるので、結構安心できるな、と思ってますけどね。だから変な意味で突き放さないっていうかね、突き放すところは必要なんですけど、変な意味で切っちゃわないっていうかな。大事にしてらっしゃると思うから。

吉川　まあ色々あちこちバラバラになるけど、私はね人間関係科を作る前にね、一般心理学を教えてたでしょ、さっき言ったようにね。参考書いっぱい前もって読んで、その中からわかりやすいように解説するような感じで、生徒に。昔だよね、最初のとき、心理学を教えろって言われて、仕方ないそれ以外他に何も知らない。だけどその後でやっぱり、そういう体験学習とか色んなことを学ぶとね、やっぱり心理学を教えるときもね、注意するようになったしね。だから、心理学とはっていったら、心理学はこれこれこうこうってね、学生が暗記

してね、こうこうって。そうじゃなくて、「心理学っていうようなことでするんだけど、最初にちょっと実験したいんだけど、ちょっと数名必要なんだけど、前に出て」って、最初、会った時ね、こう言う。だけども新入生だから、心理学初めてだから、数人が出てくるけど、出られない、出たくても出られない人もいるでしょ。こうやって出てくるでしょ。知ってるでしょ。そして出てきました、って言ったら、はいよろしい、って言って実験終わりましたって帰すのね。

グラバア　ボランティアっていうの。

吉川　やるでしょ？たとえばそういうようなことなの。そして、それについて、「今実験するから前にいらっしゃい」って言ったときにどう感じたか、一人一人ね、感じたのか。そして、出たかったのか出たくなかったのか、出たくても出れなかったのか、色々あるでしょう。だからこの数分間のことだけど、それでグループに分かれて話し合うの。あなたはどういう風に感じたか、出たかったけど出られなかった、とかね。それは何故なのか、お互いに話してごらんっていうことで、たったそれだけのちょっとしたことでね、話させるとね、考え方がみな違うでしょ。

　その自分たちの感じ方、考え方が違うってことがそこで分かって、みんなで一人一人違う感じだねって。そういうようなこと、感じをね。何故そうなのかとかね、そういうことを分かってくの、これ心理学なんだよってね。だから、心理学は、何か勉強して、あれだこれだって覚えることじゃないよって。そういうようなことやりたい。たとえばそういうそういうような簡単なことでもね、ちゃっちゃっと、こう入れていくね。それでやっぱり、ただ心理学の講義を聞いて、暗記してっていうのじゃなくて、お互いがひとつの話題でこうね、材料として。それこそたとえだけど、話し合うチャンス。みんな新しいでしょ、友達知らない。ちょっとそこで数人が集まって、今、たったこれだけのことしたけど、「先生が実験するから前に何人かおいで」って言ったときに、その瞬間何を感じたか、そういうようなことをね、ただこうこうこうって理屈じゃなしに、自分がどういう風に感じたかって、それ大事なんだよって。自分じゃない、人は全部同じじゃないねってね。たとえばそういうような風にして、心理学を勉強するんだよって。そういうようなね、たとえばだけど分かりやすいこと。そういうような授業に変える努力をしていく、そういうような変化もやりましたね。それは自分が気がついたからやったんじゃなくて、どっかで色んなことで覚えて、それをやっぱりやっていいと思うことだったら、すぐにみんなでしてもらう。だから、やっぱり授業もちょっとはね、たいして変えられなかったけれども、一時間くらいの中で。そういう風に行動に移して、ただ自分一人でじゃなくて、一人でやってもいいけど、どういう心の動きをしたかということを大事にしていく、まず何かの事の決まりを覚えるんじゃなくて。まあそんなようにね、変化もありましたよね。だからね、外から見てこうだと思ってもね、色々あるけど、その体験？なんかね、前は和気藹々として何か柔らかい感じだったけど、硬くなっちゃったね、っていうのを感じていたら、それを話したらどう？どうなんだ？っていう風に言ったら、あなたは一人だけじゃないかもしれない、それに反対する人もいるかもしれな

い、そういう風にしてね。

人間の尊厳っていうのは、言葉は硬いけれども何言ってるかというと、人間はやっぱり、神様から人間として作られて、人間としての価値を持ってる。だけれども、それはそのままだったら、本当の人間の本質っていうか、人間として大切なものがね、伸びていかないでしょ。やっぱり触れ合う事によって、それをね、成長させるの。自分も成長して、他の人も成長させていく。そういうのが人間の尊厳、っていうのを掲げてあると思うの、要するに。私は人間関係科を考えていたときにね、最初に心理学、心理学を覚えて忘れて、単位を取って、ちょこっとして、何か決まりみたいなものを覚えて、いろいろしたって、本当にその人間の尊厳に役立ってるのかなって、それが言わず語らずの悩みだったわけよ。だから、JICEのあれに行ってね、本当にここにいて、ここが素材ですよって言われて、今までの私だったら、「あの人おかしな話ばっかりしてくだらないなあ」、って言って見てるね。最初の自分はそうでしょ?そして、私の番が回ってきたら、「自己紹介なんか大っ嫌い」って、「自分の事なんか、そんな簡単にね、一言で言えるもんじゃないですよ」、なんてね。そんな感じでしょ。だけれども、そうじゃないんだっていことね。それだったら成長しないでしょう。だけどそこで触れ合って、分かち合ったり、いろいろ喧嘩してもいいですよね、だけどもそういうようなことをしながら、人間の尊厳が育っていくのね。愛っていうかな。そういう風な事を考えて。それで、最初に、「色んなのがあるよね」って言ってね。つまんなくたってね、つまんないっていうとこもないしね。心理学の授業を教えて、約束だから教えて、忘れたって仕方が無い、今自分の役目は教える事やって、工夫もないしどうしてみようもないの。どうしていいか分かんなくって。だけど、それで私人間の尊厳に役立ってるのか、尊厳を伸ばすとか助け合うとかやってるのかな、ってね、そういうようなこともありましたよね。口では言わないけども、何か感じてるでしょ。だけど、それがやっぱり（T）グループに参加した事でね、あんまり楽しいグループでもなかったけれどね（笑）、初めはね、そうでしょ?段々その意味もわかってきた。こうですよっていうのはね、自分で体験してそれがわかるわけよね。そういうようなこと、色々ありますよ。あれこれいっぱい色んことを考えるけど、何言っていいかわかんない。何か参考になったら、だから、私はずっと授業の形だって、工夫によって、変えていかれるし、ただ自分でそうやって一人で工夫するけど、私がそういう風にするのは他の人を見てね、参考にしながら、やってくわけでしょ。それからもうひとつ、その全体を変えたいっていうんじゃなく、もうちょっとここ、自分だけじゃなくって、みんなと共にならやっぱり発言していく。何か集まりがあるわけでしょ、反省会じゃないけど、学校で。何かしらない、前はね、もうちょっと自由でね、だけど最近なんか堅苦しいわ、とかね。どうしてだろう、これでいいんですか?って言ってったらいいよね。

アッセマ　かなり言ってくれてます。

吉川　そうやって話し合っていかなくちゃ。

林　私はそういうところ言っちゃいます（笑）。

アッセマ　でも、かなり会議体で発言してくれます。

林　こんな事言ったら嫌われると思って（笑）。

吉川　発言したからってみんな、「はいそうですか」ってついてきやしないけれど。それはね、言わないでしょ。私だってね、人に言われて…「たとえだよ」って言われてね、私は「分かった！」って言ったのね。分かった、分かりましたって一言言ったけど、みんなはね、何が分かったのかも訊かないよな。私が何が分かったのかも訊かないでしょ。だけれど、分からないけれど分かったな、っていうのはみんなが分かってる。私が分かったんだってことは分かってるんです。そういうようなことでね、すぐに喧嘩してね、「こういうことが分かったよ、言ってることが分かったよ」、そんなことは言わないけれど、分かってますよ、私が何を分かったか。誰一人、「あんた何が分かったの？」なんて訊いた人いないし。でも私が分かったことは、みんな分かるの。だから安心して、すぐ返事が来なくたって、やっぱりそうやって語りかけること。大庭先生が人間関係科作るときに私を連れて行ってそうやって言われたように。人間関係科、人間関係科、前も私、人間関係科って、別の意味でね、言ったことあるんですよ。だけど、それで乗ってくる人ってないでしょう。ところが、大庭先生ってっていう方は、私が、「人間関係科なんていかがですか？」って、咄嗟に会った時にひょっと言ったら、「そいつは何だ？」ってこうくるでしょう。そこなのよね、「そいつは何だ？」って。それから時間取って二時間も話をして、先生はそれで決めちゃうわけでしょ。あれが、人間関係科なんて前から言ってるけど、何なのか分からんって言って、ひゅって流す人だっているしね。そこが私、大庭先生がやっぱりなさったと思う。

アッセマ　上司に恵まれていらっしゃる。

吉川　そしてそれをすぐに理事長に。理事長もそういう人でしたよ。本当によく人の言うことを聞く人でしたね。すぐに何か変えるっていうわけじゃないけど。あのお二人は本当に珍しいくらいでしたね。珍しいっていうのは言葉だけかもしらんけど。私が柳原先生に電話で、「相談に行っていいですか？」って言って、「理事長がそう言ってますよ」って言ったら、そしたら、「ああ、そういう理事長が欲しいねえ」っておっしゃったけど、本当にね。そこだけで、柳原先生も理事長さんを好きになっちゃって。そして、わざわざ来るって。そんな理事長があったらいいねえって言った。だけど、大庭先生という方もね、色々な面があったでしょうけど、何であれ、「そんなこと」っていうのは決して言わない先生、何だって聞いてくださるのよね。すぐに何でも、いい、いいとは言わないけどね。ボルト神父様もそう。二人があったからね、中心になってらしてね、本当に良い方に巡り会った。藤岡さんも良い人でね、「素敵よね、あなた」って言ったら「ありがとう。嬉しいわ」って言ってくれる（笑）。「あなたって素敵ね」って言ったら、そういうような返事、返ってこないですよ。「これは安物で、古いお古をもらったんですよ」、とか、変な言い訳してね。何だっていいじゃないですか、「素敵ね」って言われたら、「ありがとう」って言えるのね、そういう感じ？あれはもう新しいでしたよね、私にとっては。なかなかそこまでいかないよね。それはもう前に感じたことだからあれだけれどもね、私の知らない素敵な人はいっぱい周りにいらっしゃると思うんですけどね。

アッセマ　人関のそういうTグループという五日間で、最初は頑なになっていたりクローズしてても、どんどん心が開かれたり…Tグループご存知ないので、林先生は。私は人関で…

林　噂は色々聞くんですよ。

アッセマ　最終的には、一人一人の尊さに出会うというか、そういうような親しさも出てくるという不思議な五日間なんですよ。

吉川　私たちも丁度ここに来た時に変わってたよね。最後にメリットさん、みんなホールに引き出して、歌、歌ったり踊ったり。その時は、メリットさんが私を引っ張り出して踊ったんですよね。

グラバア　そうそう、二人で踊られた。それは覚えてる。

吉川　そして藤岡さんがね、ご自分のイヤリング取って私にくれた。メリットさんが私にアクセサリーをつけて、わいわいわいわい…。

グラバア　水色のね、こういうイヤリング。

吉川　あなたのね。それは私はまあ、ひとつの遊びだと思って。でもこんなものつけたことないしね。翌朝つけていこうかな、と思ってね。セッション終わっちゃったし、食事のときに、これつけていくかと思ってつけて行ったんです。そして、つけては行ったけど、外そうとしてたら、メリットさんが来て、私の顔見て、「タレントだよ」って。タレントはこれ、立派なタレントよね。一言ね、意味があるんですよ、一言にいつでも。私はね、何がタレントかなと思って。もらっちゃっていいのかしらんけど、これがタレントのものかな？それとも夕べ、私踊ってからこれもらったから、踊るタレントがあるし（笑）、色々考えるんですよね、そのときは。でも私は分かった、タレント。一人一人がタレント持ってるよ、必ず意味があるのよ。そして私は、Tグループの意味、Tグループの目的は何なのか、一人一人がタレントを持っている、それを活かしなさい、そういう風に言ってくれたね。Tグループの目的何ですか？一人一人のタレントを十分に活かすように。そういう風に取れた。ああ、そこでTグループの私なりの意味、ああそうなのか。これはあなたの財産にもらいなさいとか、そんな意味じゃないね。踊りが上手だったからあげたっていうのもね、それもひとつのタレントをかもしらんけど、上手い具合に踊ったと思うよ、みんなが手を打ってくれたもん（笑）。その後これをもらってね。藤岡さんがまた気を利かせてパッとそのこれを取ってメリットさんへ、メリットさんが（私に）くださるでしょ。これをつけたら、みんなが可愛い可愛い可愛いって（笑）。すぐにお返しはしたけれども、覚えてる。水色のイヤリングだったよね。覚えてるのよ、四〇年前のこと、何色のイヤリングなのか。

アッセマ　一回きりのことですよね？一回だけで一生のね。

吉川　楽しかったね、あの頃はね。まだあの時、あのセッションのことはよく覚えてる。

アッセマ　一週間の出会いが一生ですね。一生の繋がりですね。

吉川　そうですよ、一期一会。どういうふうになるか分からないからね、この出会いもね。皆さんに出会っているのね。

アッセマ　今日は朝、雪でした。私はその雪を見て、そうだ

よね、これだけの三人、三人が集まるんだから、と思ったんです。一人一人の一生が、何か人関をご縁に出会ってたのには、何かのご縁があると思うんですね。空からの雪でそう思いました。

吉川　とにかくね、だってこの瞬間ってもう永久ですよね、この会ったということは事実だし。それがどうなるかそれは分からない、私にはね。だけども一度会ったということは……私、永久っていうのがね…難しいね、哲学者じゃないから。私頭は弱いんだけどね、今ここ、ってよく言うでしょ。でも、「今」っていう時間ってないね。だって、「今だ！」って、捕まえようがないじゃない。もう、すぐみんな過去になって、すぐ過去になっちゃって、今なんて捕まえようがない。今、今、今、なんて勝手に言ってるけどね、過去の長いのを捕まえて「今」って言っているのかしらんけど。今って何だろう、今ここって何だろう、って思ってね。私はね、哲学…だから時がないこと、時の中にいないこと、それは永遠だ。だから、たえず永遠に繋がっているんだと思う。今を生きる、っていうことは、永遠を生きること。今話したことは、永遠に話したこと。私が言わなかったことは、永遠に言わなかったこと（笑）。

林　そうですね、うん。

吉川　そうでしょ？チャンスがあるのに言わなかったら、永遠に失ったんだよ。

林　そうですね、うん。やっぱり、言わなくちゃいけないですね（笑）。

吉川　それは私の大好きな哲学なの。だけど今ってね、本当に不思議なものよね。今、今って言ったって、今なんてもうないんだよ。ない、時間。おなかにあることが永遠なの。

林　そうですね。

吉川　な、なんで、その、お説教じゃないよ（笑）。

林　良いお話で…ちょっと、時間がもう。本当に長時間になりましたが、良いお話を伺って。締めくくりということで。

吉川　またね、例の通り、ごめんなさいね（笑）。

林　いえいえ、とんでもないです。本当に今日はありがとうございました。本当に、良かったです。良いお話を伺いました。